

紙屋治兵衛  
きの國や小はる

心しん  
中ちゆう  
天てん  
の  
網あみ  
嶋しま

## 解題

享保五年十二月六日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時六十八歳)である。

本曲は三巻に分れてゐる。其の詞章は流麗を極め、場面の變化にも富み、親子・兄弟・夫婦・男女間の情愛も濃かに織込まれて、人物の性格もよく顯れ、近松作品中傑作の一である。

## 實説

本曲の基いた實説は詳でない。蓋し天満宮前の紙屋治兵衛と、曾根崎新地紀伊の國屋の抱妓小春とが、享保五年十月十四日に網島大長寺のほとりで情死した事實があつたのであらう。

「攝陽奇觀」卷之二十五ノ上、享保七年の條に、「十月十四日夜 紙治小春心中 大坂天満紙屋治兵衛曾根崎新地紀伊國屋小春といふ女郎を連て網島大長寺に來る折から十夜回向參詣の群集に紛れ終夜法座につらなり晨鐘の頃境内の傍に左の一紙を懷にして空しく成る治兵衛年廿八歳小春年十九『今宵ありかたき御おしへにあつかり忝奉存候私共淺間敷身の果未來の程もおほつかなく存候何とそなきあとの御とむらい被成被下候は、忝奉存候これのみ御頼申上度書殘申候以上十月十四日治兵衛小はる 大長寺様』墓所は寺内表門の傍にありて鯉塚に竝ぶ」とあつて、墓標の圖を載せ、其の表面に「釋了智、側面に「紙屋治兵衛」とある。然し小春・治兵衛の情死は、享保五年十月十四日と見るべきであつて、享保七年は誤である。今も大長寺(今は舊地から二丁餘東と共に移轉)に小春・治兵衛の過去帳・位牌・墓標があるが、いづれも後人の作であるとの説がある。又治兵衛の妻おさんの墓は、天下茶屋の街道筋(住吉街道)の東側安養寺にあつて、法名を自譽智專比丘尼といひ、寶曆九年五月二十九日歿した事が刻してある。そしてその寺にはおさんに關する何の記録も存してゐない。この墓に就いても信をおかぬ説がある。

この作の由來に就いては、「翁草」に「享保五年の冬、近松翁住吉新家の酒樓に遊びてありし時、俄に大坂より芝居者來り、ゆふべ網島の大長寺に男女の情死あり、何卒速に大坂へ歸り淨瑠璃に作りて給はらば、あす一日の稽古にして明後日より興行せんとて、ひたすらに頼みけれ

ば早駕に乗りて大坂に歸り、駕より下りて其儘に筆をとり、駕にて走り歸りしまゝ書きつけしとて、走り書と書出し、直に藤の本は近衛流、野郎帽子は紫のと書きつけ、道行の外題は思の橋盡しと名づけしは、大坂にはいくらか橋あるをもてしか名づけしといへり、云々」とあれども、この説は後人の假託である。

影 響

本曲は其の後も屢々上演されてゐる。又歌舞伎にも仕組まれた、其の最初は享保六年二代目市川團十郎によつて江戸森田座に上演された。本曲を改作した物では、「双扇長柄松」(寶曆五年七月・「小はるちゅうひんこうはさのかけだて」明和六年七月)、「心中紙屋治兵衛」(安永七年四月北の心地芝居上演)があり、其の後「増補紙屋治兵衛時雨の炬燵」も出來た。これ等いづれも俗受を主として技巧を凝らし、却つて藝術の香高い巢林子の原作を悪化したものである。

上之卷 (曾根崎新地遊廓 河庄の場)

登場人物の主な者

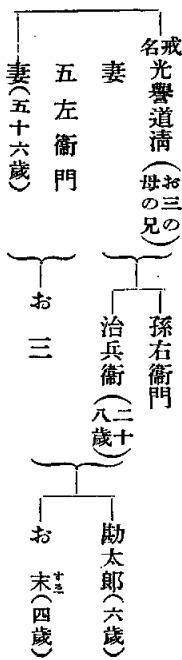
なままだ坊主

小春(大阪道頓堀風呂屋の湯女から曾根崎新地紀の國屋の遊女となる。十九歳)

紙屋治兵衛(大阪天満宮前町紙商二十八歳) 太兵衛(伊丹の商人)

紙屋治兵衛の系圖

は夫婦關係を示す





春 色 霞 網 島 明 治 七 年 三 月 村 山 座

梗 概

時正に初冬、夜風身にしみ、道行く人も足早くなる頃、曾根崎新地は青樓の門行燈連つて晝の如く、絃歌四方に聞えて人の心を浮き立たせ、粉黛の美女が輕裾を飄して往來する。なまいだ坊主が鉦を叩きながら、唄を歌ひ念佛を唱へて通る。都や鄙の數多の人達は、氣詰りな階級の壓迫や、世渡りの苦勞から脱れて、氣儘に放歌し歡樂に酔ふ此の狹斜の巷を指して集つて來る。

紙屋治兵衛は、氣立の優しいお三を妻とし、勘太郎・お末といふ二兒を持ちながら、平凡單調な商家の暮し向に倦み、既に二年の間この新地に通ひ、紀の國屋の美妓小春と馴染んで、互に熱烈な戀に落ちた。伊丹の太兵衛も小春を慕つて、治兵衛の戀敵となる。又小春を愛する客達も、其の背後に治兵衛がまつはつて居ると聞いて招かなくなつた。太兵衛は小春に嫌はれても、黄金の力で根引にし、手活の花として眺めようとする。裕福ならぬ治兵衛は、之が爲に小春との仲を割かれねばならぬので、互に思ひ詰めて情死を申し合はせた。それからは小春は憂愁に沈み、めつきりと瘦せ細つた姿が、誰の目にも見える様になつた。抱主は小春の身を氣遣うて、なるべく治兵衛に逢はせぬやうにした。

治兵衛の一門は彼の放蕩を苦に病み、殊にお三は夫の身を案じて、手紙を小春に寄せ、己が心の悲痛を打明けて、どうぞ貴女から治兵衛と疎遠になるやうにと頼んだ。又治兵衛の兄孫右衛門は、豫め河庄と相談を遂げ、武士に扮して河庄に小春を

招き、遊興に托して小春の心を探つた。小春は既にお三の書面を讀んで、其の心に同情し、哀れにも愛人の爲に一人心中を決心して居たのであるから、孫右衛門の間に答へて、治兵衛と情死を約束したのは、無分別であつたことを語つて救ひを求めた。

この時治兵衛は、小春を尋ねて河庄の門先に來り、格子から覗いて、小春が侍客に揚げられて嘔き合へるを立聞きし、さては今まで我を欺いてゐたのであるかと、胸も裂けんばかりに怒り、刀を抜いて格子の間から小春を突いた。が座は遠く、「これは」とばかり、怪我もなかつた。侍客は透さず飛掛り、治兵衛の手を捉へて格子に縛り附けた。折から太兵衛が通りかかつて之を見、治兵衛を打擲して盗人呼ばはりした。侍客は乃ち太兵衛を引捉へ、治兵衛が何を盗んだ。サア吐かせ」として、蹴飛ばし突倒し蹈みのめし、「サア治兵衛、蹈んで腹を癒よ」と、足下に突附けた。太兵衛は治兵衛に踏躪られ逃吼して見物人に嘲られる。人立透けば侍客は立寄つて、治兵衛の縛り目を解き、そして頭巾を脱いだ。それを見た治兵衛は、「ヤア兄様であつたか、面目ない」とて、頭を垂れる。小春も「さては兄御様かいの」と驚く。治兵衛は小春の不貞を罵り、「畜生め狐め狸め」と叫び、互に取替はした起請文の取戻しを迫つた。小春は涙に暮れて愛人の起請文を孫右衛門に渡したが、其の中にお三が小春に差出した文も交つてゐたのに氣付き、其の文だけは取戻さうとした。孫右衛門は「我一人披見して火に入れる。決して偽りは申さぬ」とて、これを黙讀した後、起請文と共に燒棄ててしまつた。

治兵衛は小春を蹴飛ばし、「彼奴に騙された、残念な」と、泣いて改心を誓ひ、兄と連立つて去る。哀れな小春は始終泣きながら、首を垂れて愛人の暴言暴行を受け、物思ひに沈んで其の後姿を見送る。察するに治兵衛の心底はなほ苦悶にくれて、小春をきつぱりと思ひ切る事は出来なかつたであらう。愛人の爲にやがて死なうと決心してゐる小春の眼にも、名残を惜む涙が流れ出てゐるとは、誰も氣附かなかつたであらう。

## 評

歡樂の巻を往來する數多の人々の中に、美しい小春の惱める姿が現はれる。彼は既に愛人の爲に獨り死なうと決心し、其の死

方に就いて心に迷うてゐた。折から初見の侍客に揚げられ、直に死方に就いて尋ねたのは、彼の女の胸に押へきれぬ深い惱みがあつたからである。熱烈な戀に身を焼く其の愛人治兵衛の個性や、又戀敵太兵衛の下劣な性格や、治兵衛一門の心盡しや、それ等の人々の片影を描寫した中にも、小春の意氣あり張りあり情ある性格は、讀者に強い印象を残すであらう。

本巻は場面の變化・背景の妙を極め、其の詞章も流麗にして、説き來り説き盡して人情の琴線に觸れる。この近松情調に、我等はえも言へぬ懐しさを感ずるのである。

○天の網嶋 この題名については、本曲の終りの所誓の網嶋の解釋中に述べた。

○山上：れんげればつからふんごろ

「山上」は蓮山淨土、「笠」は天人のかざせる羅蓋、「空がくんぐる」は虚空驚けるであつて、其の他の語句には淨土の法味樂の拍子を形容したのもあつて、要するに「法華經」如來壽世品の偈文中にある「衆生所遊樂」の安樂世界をいふ片言であらう。そして菩薩(救)の集れる享樂界(遊里)をきかせたものである。之をどめき頃のつととしてまづ掲げた。

○よね 遊女。蓋し遊女の顔容が、菩薩の如く美しいといふ意よりして、遊女を菩薩と異稱し、また米「よね」を菩薩と異稱するより、遊女をよね米ともいうたものであらう。

○観川 往時堂島と曾根崎との間を流れてゐた川。観川遊廊は北の新天地又は曾根崎新地ともいふ。このあたり縁語を以て面白う續けた。「深へも干されぬ観」は観貝で大海をすくふといふ語による。そして戀の道は止め難い意をきかせた。

○文字が關 「文字」を「門司が關」にかけて、「止

紙屋治兵衛 心中天の網嶋

山上（歌）ばつからふんごろのつころちよつころふんごろで、まてとつころわつからゆつくる〜たが、笠をわんがらんがらす、空がくんぐる〜も、蓮華蓮華ればつからふんごろ、妓が情の、底深き、是かや戀の大海を、深へも干されぬ観川、思ひ〜の思ひ歌、心が心止むるは門行燈の文字が關、浮かれぞめきの徒淨瑠璃、役者物眞似納屋端歌二階座敷の三味線に、引かれて立寄客も有紋日遁れて顔隠し、仕過しせじと忍び風仲居の清が是を見て、身を遁れが來りける、頭巾の鍛を取外し〜、二三度逃延びたれ共、思ふお敵なれば遁さじと、飛懸りひつた

むるしの縁語として用ひた。ここの文は、門に吊せる行燈に揚屋の名を記してある文字を讀んで、立寄る心になつて足を止める意。

○ぞめき 願き。

○あだ淨瑠璃 あた口の淨瑠璃。でたらめ淨瑠璃。

○役者物眞似 俳優の身振、みぶりに聲色(こわいこ)を眞似ること。○物眞似を見よ。

○納屋端歌 原本「納屋は歌」とある。納屋で遊女又は遊客などが語る端唄をいふ。

○もんび ものび(物日)の轉。祝日をいふ。紋日には遊客は揚屋や遊女などに祝儀をやらねばならぬから、それ等の費用を出すまいとして登壇せぬを「紋日連れて」といふ。

○仕過し 遊興に金をつかひ過し。

○仲居 遊女屋・料理屋で、客に應接しその用を辨じる女中。

○身を遣れが 鍛と頭巾 「身を遣れ」は三保の谷の地口。三保の谷は源氏の臣三保の谷四郎である。三保の谷四郎が透ゆ延びようとするを遊客に當て、又羅七兵衛景清を仲居の清に當て、遊客に勸めて之を取押へるをいう。ここの文は謡曲「景清」に「三保の谷が着たりける兜のしころを取外し、二三透ゆ延びたれども、思ふ敵なれば遣さじと、飛懸り兜をおつさりえいやと引く程に、鍛は切れて此方にままれは云々」とあるに據つた。

○お敵 「敵は匹敵の意。遊女等から相手の客をいひ、又客から己が相手の遊女をさしていふ。相方を

り惡洒落、ごんせと止めたる女 景清鍛と頭巾、つい踏み被る客も有、橋の名さへも梅櫻花を揃へし其中に、南の風呂の浴衣より今此新地に戀衣、紀の國屋の小春とは、此十月に徒し名を残せとの兆かや、今宵は誰か、呼子鳥、覺束なくも行燈の影行違ふ妓の立歸り、「ヤ小春様か何といの、互に一座も打絶へ、貴面ならねば便も聞ず氣色が悪いか、顔も細り糞れさんした、誰やらが咄で聞けば紙治様故、内からたんと客の吟味に逢はんして、何處へもむさとは送らぬの、いや太兵衛様

○ひつたり惡洒落 べたりと寄添ひ、惡洒落のお方。

○ごんせ ごんせ。おいでなさい。

○女景清 仲居の清を景清にいひかけた。

○踏み被る 人の衝中に陥る。「被る」は頭巾の縁語。

○梅櫻 鵜川に架せる梅田橋櫻橋。

○花 解語の花。美女をいふ。

○南の風呂 大阪島の内道頓堀にあつた風呂屋をいふ。當時の風呂屋には湯女「ゆな」と稱して、表面は浴客の髪を洗ひ又は垢搔をなし、内實は娼妓同様の所行をなす賣春婦が居た。故に風呂屋は遊女屋をも兼ねたやうなものであつた。小春は道頓堀の風呂屋の湯女であつたのが、會根崎新地の遊女に轉じたのである。

○新地 鵜川遊廓をいひ、北の新地又は會根崎新地ともいふ。

○戀衣 左袂をきる身になつた事をいふ。

○徒し名 浮名。享保五年十月十四日小春、治兵衛情死して

浮名を流すことをいふ。そして陰曆十月を小春といへば、「小春」は此十月とさひつづけた。

○呼子鳥覺束なくも 誰か呼ぶを呼子鳥にいひかけて、「古今集」春上部の歌「をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな」の句によつた。「呼子鳥」は古今傳授の一であるが、梶林子は郭公であるとの説に據つてゐる。

○何といの さうして居られたか。大阪婦人の常用する口吻をよく寫してある。

○貴面ならねば お目にかかりませぬは、遊女の常用する口吻を寫して、見るやうである。

○たんと 「た」は「足りぬ」との約。充分に。澤山に。甚だ。

○むさと うつかりと。「むさ」は「むさう」(無左左)の義である。

○伊丹 兵庫縣川邊郡伊丹町をいひ、小春に對する紙屋治兵衛の戀敵太兵衛の在所。小春は太兵衛に身請けされるを嫌ひ、愛人治兵衛の爲に一人心中を決心してゐるのである。

○いとしばなげ 「いとしばなけ」の「し」は「ば」が轉倒した語。いとしばしけ。痛はしけ。

○さ程にもない 實は深い仲でありながら、人の風はくを氣遣つて、それ程に深い仲でもないを憚つた。その憚る所に更に深い仲であるのが察せられ、「いとしばなけ」の語に應じて妙を極む。

○せいきき 借上をぬかすこと。おもひあがつて口はほひろく高ぶること。「せいききは世にけい」といふ。全盛の意にいふ。「せいききは世にけい」といふ。

○堰く 逢ふ瀬を堰く。  
○侍衆として河庄方へ送らるるが 侍のお方のお招きといふので、私は河庄方へ送られますが。「河庄」は揚屋の名で、奉主の名は見えぬが、河内屋庄兵衛ともいふか。

○壹丁目 曾根崎新地一丁目。  
○なまいだ坊主 念佛に淨瑠璃・小唄などの徒口あひだちをまぜ、鉦を叩いて歌ふ辻遊人であつて、そのこぼれはこの後文に書かれてゐる。

○てんがう念佛 ふざけた念佛の義であつて、淨瑠璃・小唄などのあだ口の後に詠り念佛を唱へるこゝで。

○のんこ 兩鬢を細く狭く残し、髻を高くする結髪で、伊達を好む若者の間に流行した。「色箱箱百人後家」に「縁鬢つくりののんこあたま」。

に請出され、在所とやら伊丹とやらへ行かんす筈共聞及ぶ、どふでござりやす」

と言ひければ、ア、もう伊丹とやらと言ふて下んすな、それで痛み入はいな、いと

しばなげに紙治様と私が中、さ程にも無い事を、あのせいこきの太兵衛が浮名を

立て、言ひ散し、客といふ客は退き果て、内からは紙屋治兵衛がじやと堰く程

に、文の便も叶はぬ様に成やした、不思議に今宵は侍衆として河庄方へ送ら

る、が、斯う行く道でも若し太兵衛に逢はふかと氣遣さ、敵持同然の身持、何

と其處らに見へぬかゑ、ア、そんならちやつと外さんせ、あれ壹丁目から

南無阿彌陀坊主が、てんがう念佛申て来る、其見物の中に、のんこに髮結ふての

ららしい、伊達衆自慢といひそな男、慥に太兵衛様かと思つた、あれと爰へ」と

いふ間程なく焙烙頭巾の青道心、墨の衣の玉襷見物ぞめきに取巻れ、鉦の拍子も

出合ごん、ほでてん、ご念佛にあだ口嚙交せて、焚燗流は珍しからず、門

を破るは日本の朝比奈流を見よとて、貫の木逆茂木引破り、右龍虎・左龍虎討取

て、難なく過る月日の關や、なまみだなまいだ、迷ひ行共松山に、似

たる人なき浮世ぞと、泣いつエ、ワハハハ、笑うつ狂亂の、身の果何



○のちのらくら。なまけ。

○焙烙頭巾 焙烙の形に似た頭巾であつて、大黒頭巾又は丸頭巾ともいふ。「和漢三才圖會」頭巾の條に「俗家則多用、真黒色、應、頭形、而圓淺、似紗縹、者名法樂頭巾」。

○青道心 なまきま坊主。

○玉襪 たすきの美稱。

○出合ひごん 語る拍子に鉦の拍子も行き合つて、ごんごんたたくごの意。

○ほでてん 念佛 ほでてんがうに、てんご念佛をいひかけた。「ほでてんがう」とは手いたづらの義。鉦の拍子もその場にてくはしての手いたづらなことをいふ。「てんご念佛」は「てんがう念佛」の約。

○道具屋 道具屋節の略。道具屋吉左衛門のはじめた勇ましい調子で語る淨瑠璃の一派。

○焚燗流は 月日の關や 近松作「國性爺合戦」其立軍法(九仙山)にある文である。それを道具屋節で語るのである。「焚燗」は漢の沛公(後に高祖)の臣で、沛門の會の時、門衛を撞倒して營内に入つた勇士である。

○朝比奈 朝比奈三郎義秀は建保元年五月和田合戦の時、鎌倉御所の南門を破つた。

○逆茂木 棘木を逆立てて垣とし、その本を杖に結附けなごして敵の侵入を防ぐもの。

○右龍虎 右龍虎も左龍虎も明の逆臣李順天一味の健で、南京雲門關の守將である。國性爺と戦つ

心中天の綱嶋

と淺ましやと、芝を褥に臥しけるは目も當て、られぬ風情なまみだなまいだ、

紺屋の徳兵衛、房に元より戀染込みの、内の身代灰

汁でも剝げず、なまみだなまいだ、

「何ぞ」、「エ、忌々しい、やう」此比此里の心中沙汰が鎮つたに、それ措いて

國性爺の道行念佛が所望じや」と、杉が袖から報謝の錢、たつた一錢二錢で三千

餘里を隔てたる、大明國への長旅は、合はぬだ佛合はぬだ、

言ふて行過る、人立紛れにちよこ、走とつかは内屋に駈込めば、是は早い

て敗死す。

○月日の關 月日に關守なく過るご、雲門關をいひかけた。

○文彌 天和貞享頃、大阪で岡本文彌が語り創めた哀婉な調の淨瑠璃節。

○迷ひ行けども 目も當てられぬ風情 都一中の正本、榎久末の松山、榎久狂亂道行の文である。これを文彌節で語つたのである。

○松山 延寶頃大阪新町の遊女である。大阪御堂前の豪商榎屋久右衛門の息子久兵衛は松山に馴染み、遂に發狂し、川中に松山の幻を見て飛込み溺死したといへど、實説は詳でない。

○五い 紺屋の徳兵衛、剝げず近松作「丹波與作待夜のこころ」し與作助の冒頭に見える文である。蓋し海老屋節隨歌の改作であらう。

○紺屋の徳兵衛 遊女お房に馴染み、遂に情死した者であるが、實説は詳でない。近松作「重井筒」はこれを仕組んだものである。

○國性爺の道行念佛 近松作「國性爺合戦」の道行文に念佛をまぜて歌ふこと。

○杉 下婢又は遣手の名を普通「杉」といふ。

○報謝 物を贈つて報いる義。僧が佛事を修した場合に、之に金品などの布施物を贈ること。

○江戸 江戸半太夫の創作した淨瑠璃節の一派。こころその江戸節で語るのである。

四四九

○小春様々々はるくで小春様「はる」の音を渡つても重ねて修飾し、且つ小春を懐かしがつて度々口にするさまを見せた。

○花車 遊女屋の主婦をいふ。蓋し遊女を花に喩へて、花を題はずといふ意の稱であらう。

○李踏天 「同性相合戦」に見える人物。明の右將軍となりて叛逆を企て、恩宗親皇帝・皇后・皇族忠臣を滅して自ら國王となる。後に南京城で同性相と戦ひ、捕へられて酷刑に處せらる。

○無い名 自分にはさやうな名はない、その無い名。

○心中よし 心ほせよくて義理を守り、氣性のまつほりしてゐるをいふ。(見索引)

○意氣方よし 心立てまつほりさまわかかなるをいふ。氣立てのよい。

○得知れぬ人 存じて居らぬ人。前文に、紙治様と私が中、さ程にも無い事をし、言へるさ同じ筆法。

○天満大坂三郷 天満及び大阪全町の意。「攝陽落穂集」に「大坂三郷の事」三郷といへるは北組・南組・天満組なれども、大坂は二郷にして天満は南中島の内なり。大阪は「おさか」といふ。原本にも「大さか」とある。「天満」を取上げていうたのは、太兵衛の隠微統治が天満宮前町に住めば、それが氣になるからである。

○仕切 仕切銀の略。買主が賣主に仕切りさせた品物の價を支拂ふ總金額。取引決算の拂渡金。

○十貫目 享保小判金一兩に新銀(即ち享保銀)

お出、お名さへ久しう言はなんだやれ珍しい小春様、と主の花車が勇む聲、是門へ聞える、高い聲して小春「言ふて下んすな、表に厭な李踏天が居るはいの、密かに「頼みやす」と、言ふも漏れてやぬつと入たる三人連れ、小春殿李踏天とは、無い名を附て下された、先禮から言ひまじよ、連れ衆、内々咄た心中よし意氣方よし床よしの小春殿、やがて此男が女房に持か、紙屋治兵衛が請出すか、張合の女郎近附に、成て置きや」とのさばり寄れば「エイ聞共ない、得知れぬ人の徒名を立、手柄にならば精出して言はんせ、此小春は聞共ない」とついと退けば又摺寄り、「聞共なく共小判の響で聞かせて見せう、貴様もよい因果じや、天満大坂三郷に男も多に、紙屋の治兵衛二人の子の親、女房は從兄弟同士舅は叔母舅、六十日々に、問屋の仕切にさへ追はる、商賣、十貫目近い銀出して、請出すの根引のとは、蟾螂が斧でござる、我ら女房子なければ、舅なし親もなし伯父持たず、身すがらの太兵衛と名を取つた男、色里で借上言ふ事は治兵衛めには叶はねども、銀持たばかりは太兵衛が勝た、銀の力で押したらばのふ連れ衆、何に勝たふも知れまい、今宵の客も治兵衛めじや貰を、此身す

五十夕七分替と見て、新銀十貫目は金百九十七兩餘に當る。

○端郷が斧たなごうがのこ「端郷はかまきりといふ昆蟲。端郷が前の兩足を舉げれば斧を執る形の如けは「端郷が斧」といひ、以て己が力量をかへりみないで安達するに喩ふ。又邊に「欲以端郷之斧禦陸軍之險」と。

○身すがら 一人はつちで、係累なき身。

○借上 おもひあがつて口はほひろく高ぶること。

○何に勝たうも知れまい 戀の張合ひに勝つて小春を手に入れる意を、それになしに婉曲に言うた。

○貰ふ 他の遊客に招かれてゐる遊女を己が貰ひ受けるをいふ。

○身すがら 「身すがら」の「す」を濁つていうた語。前文に「身すがらの太兵衛と名を取つた男」とある。「葡匐三本鏡」(享保三年刊)四之巻、片上の辻堂の條に「誰取あぐる人もなきの涙、身すがら此片上に引越し」。

○ほたえる つけあがる。おれたはむれる。

○鉦の火入煙管撞木 火人が鉦・煙管が撞木の代用。「火人の鉦・煙管の撞木」といはないで、かく詞の前後する所に、太兵衛ののほせて居る様が見える。

○杉原紙 「和漢三才圖會」に「杉原紙」奉書紙之屬、稱薄軟也。播州杉原村始出之、故名之。

○小判紙塵々紙 小判散々に半紙塵紙をいひかく。

がらが貰ふた花車酒出しやく、エ何仰しやんす、今宵のお客はお侍衆、追

つ附見えましよ、お前はどこそ脇で遊んで下さんせ」と、いへどもほたへた顏附に

て、「ハテ刀差すか差さぬか、侍も町人も客は客、なんば差いても五本六本は差す

まいし、よう差いて刀脇差たつた二本、侍ぐるめに小春殿貰ふた、抜けつ隠れつ

なされても、縁あればこそお出合申なまいだ坊主のお蔭、ア、念佛の功力有難い、

こちも念佛申そ、ヤ、鉦の火入煙管撞木面白い、ちやんく、ちやんく、ちやんく、

紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一步小判紙塵々

紙で、内の身代襦破れ紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛、エなまみだ佛なまいだ、

なまみだ佛なまいだ、と、暴れ喚く門の口、人目を忍ぶ夜の編笠、ハア

ア塵紙わせた、ハテ嚴い忍び様、なせ這入らぬ塵紙、太兵衛が念佛怖くば、南無

編笠も貰ふた」と、引摺り入たる姿を見れば、大小くすんだ武士の正眞、編笠越

しにぐつと睨めたる、眞丸目玉は叩鉦、念とも佛とも出ばこそ、「ハア、」と言へ

○夜の編笠 夜も編笠を被て、人目を忍ぶのである。遊客

は大門口の茶屋で編笠を求め、之を被つて遊廓内に入つたものである。索引によつて「青編笠が紅葉して」を見よ。

○わせた 「おはし(御座)たの罷。ござつた。来た。

○大小くすんだ武士の正眞 歡樂の遊廓では、大小は殺風景でくすんだ物であり、それを佩てにがきつた裏面目な武士のきつすもの意。「くすむ」は沈みかたな裏面目なるをいふ。

◇真幸・元祿時代の遊女町は次第幕府の敷居地であつた。官からも幕次に取扱はれ、治外法権の地のやうな觀を呈し、階級制度が嚴で官權の壓迫に恐れざる町人等は、遊里に於て思ふままに心を伸ばした。こゝでは武士でも町人と同じやうに扱はれ、多少無禮な行爲があつても、治安に害なき限り、敢て咎めなかつた。故に太兵衛が待にこんな無禮を加へても、恐ろしいと思はなかつた。

○新銀 享保銀といひ、銀八十分銅二十分、良質の銀貨である。

○漆漉 漆を漉すに用ひる吉野紙をいふ。

○慮外 思ひの外。意外。

○櫻橋 蜷川に架す。

○中町 堂島新地の中町。

○ぞめく (餅出)

○おぢや 「おぢやれ」の略。おいであれ。

○幅がる 幅廣がる。大手を振つて闊歩する意。

○氣疎い 人氣ひみじ疎(う)しい義、釋じて氣味のわるい、怖しい意にいふ。

○慮外 意外の義から轉じて無禮の意にいふ。

○慮外ながらは、失禮ながらの意。

○後詰めてしつぱり 今後魚貫、ひいきにして下さるやうに話の始末をつけて、こつてりも漢やかに契れとの意。

○したたる樽 「したたるは、しつこくて、さつぱりせぬ貌。これに満したたる樽を、ひかけた。近松作「曾根崎心中」に「今は手代と埋れ木の、生醬

ども怯まぬ顔こゝろ、なふ小春殿はる、こちは町人刀差ちやうじんさいた事はなけれど、おれが所に澤山あまな新銀しんぎんの光ひかりには、少々せうくの刀も捻歪ねじがめふと思ふもの、塵紙屋ちりかみやめが漆漉程うるふしほどな薄元手うすもとでで、此身みずがらと張合はあふは慮外よ千萬せんまん、櫻橋さくらばしから中町下りなかつちやうくだぞめいたら、何處どこぞでは紙屑踏かみくずふみ躑にぎつてくりよ、皆みなおぢや〜と、身振みぶりばかりは男を磨みがく町一杯まちいはいに、幅はらかつてこそ歸りけれ、所が馬鹿者はかものに構かまはず忪こもへる武士の客、紙屋かみ〜と善よし悪あしの噂うはさ小春はるが身に應こたへ、思ひ崩折くづおれうつとりと、無挨拶あいきちやうなる折節おりふし、内から走はしつて紀の國屋きのくにやの、杉すぎが氣疎きそい顔附かほつきにて、只今ただいま春様送はるさまつて参りし時、お客様おきさままだ見えす、なせ見み届とどけて來こなんだと酷ひどふ叱しかられます、慮外よながらちよつとと編笠あみがさ押上げおしあげ面體めんたい吟味ぎんみ、ム、そでない〜氣遣きづかひなし、後詰あごまつめてしつぱりと小春様はるさま、したゝる樽たの生醬せいじやう油あぶら、花車はなぐるま様さらば後に青菜あそなの浸物ひたしものと、口合くちあひたら〜立歸たちかへる、至極しごく堅手かたての侍さむらひ、大おほきに無興おきし「こりや何なんじや、人の面つらを目利めきするは身を茶入茶碗ちやいりちやわんにするか、騷さわらには來申きまさぬ、此方こちの屋敷やしきは晝ひるさへ出入堅でいりかたく、一夜いちやの他出たしゆつも留守居くしやうゐへ斷り帳ことばに附つむつかしい捻ねなれども、お名聞なをきて戀慕こひたふたお女郎ぢやうらう、どうぞと一座いっしやうを願ねがひ、小者こものも連つれずに先刻まひ参まつて宿しゆくを頼たのみ、何でも一生いっしやうの思おもひ出で、お情なさけに預あづからふと存ぞんに、いか

油の袖にたるまき、戀の奴に撞はせて。

○青菜の浸物 逢はうなあに青菜をいひかけ、「浸物」は菜をゆでて醬油に浸したものをなれば、生醬油の縁によつた口合ひである。

○口合 地口、語呂の類。

○堅手 陶器の質の堅い事をいふ。この文は、浸物からそれを入れる皿などの質の堅い事に、堅氣の意をいひかけた。そして後に縁語「茶碗をいうた。」を茶入茶碗にいひかけた。

○一座 初めで座敷での出逢ひ。近松作「女殺油地獄」に「一座遊びは如法めく。」

○宿 揚屋。「色道大鏡卷一」に「宿屋と同じく揚屋のこも也。」

○圖 事柄。「倭講茶」に「圖」事情の形勢を圖と云。

○得て ややもすれば。兎角。狂言「拔段」(大藏通)に「このやうな事をば、えて例にしたがるものや。」「關取千兩權」(岩井内の段)に「物見たけいさ、えてはこちのに比べれます。」

○主 親方、即ち紀の國屋の主人をさす。

○肝心勘文 肝要の意。

○わさ／＼ わつさり むさつぱりとして氣輕に立ち振舞ふさま。

○十夜 十夜念佛の略。淨土宗で行ふ佛事であつて、舊曆十月六日から同十五日まで十夜の間、別時念佛を修すること。「無量壽經」卷下に「於此修善

なにつこりと笑顔も見せず、一言の挨拶もなく、懷で錢よむやうに扱々俯向いて

ばかり、首筋が痛みは致さぬか、何と花車殿、茶屋へ来て産所の夜伽する事は終

に無い圖」とぶつ、けば、「お道理」曰くを御存じない故御不審の立筈、此女郎

には紙治様と申深ひお客がござんして、今日も紙治様、明日も紙治様と、脇から

手ざしもならず、外のお客は嵐の木の葉でばら／＼、上り詰めてはお客にも

女郎にも得て怪我の有もの、第一勤めの妨げと堰くは何處しも親方の習ひ、それ

故のお客の吟味、おのづと小春様もお氣の浮かぬは道理、お客も道理／＼の

中取て、主の身なれば御機嫌好かれが道理の肝心勘文、サアはつと飲かけわさわ

さわつさり頼まず、小春様春様」と、いへども何の返答も涙ほろりの顔振上、あ

のお侍様、同じ死ぬる道にも、十夜の内死んだ者は、佛に成といひますか定

かひな、「それを身が知る事か、旦那坊主にお問なされ」、「ほんにそうじや、そ

んなら問いたいた事が有、自害すると首括るとは、定めし此咽を切方が、たと痛

十日十夜、勝於他方諸佛國土爲善千歳也。十夜念佛は淨土宗で重んぜられてゐるによつて、十夜の内死んだ者は、佛になる」といふ謠も出来たのである。

○旦那坊主 旦那寺の僧。  
○たんと 甚だ。既出。

○大方な事 大概の程度。この文意は、人に物を問ふにも大概な程度がある。途方もない事を問はれては、返答のしやうもないといふのである。

◇小春已れ一人死ぬはよいと決心してゐたのであるから、十夜の内死んだ者は佛になるさといひます。それが定かにならぬ間ひ、又、自害するに直括るとは、定めしこの咽を切る方がたんと痛いであらうといふのと同じ問ふ。その言ふ所は蟲の知らせであつて、遂に己れは十夜の内刀に刺されて死し、その愛人は瘡死を遂げた。作者の細心の用意が見られる。

○打てぬ顔 横手を打たれぬ顔。得心のいかぬ顔附。不審な顔附。

○雲の脚 雲の動き行くさまをいふ。この文は「人足」につづけて「あし」を重ねた文飾。

○天満 紙治の宅は天満宮前町なれば、かくいふ。

○千早ふる 「千早」は「幾早」のちばやしの義。「ふる」は「ひ」の延音で形容の語なれば、龍ぶる意。強い勢の縁によつて神の枕詞とす。

○鰐口 神社又は佛堂の前庭に懸け、銅製で扁圓中空で、下方に横に長き鰐の如き口ある樂器をいふ。奏詣人その前に吊下けける布繩をとつて打鳴す。又鰐口を恐し世評の縁にいふ。この文は「紙様」「鰐口」「大幣」「御注連繩」「神無月」「いづれも神の同音語を縁語に據つて修飾した。

○大幣の 「伊勢物語」の歌、大幣の引く手あまたになりぬれば、思へんこゝを頼まざりけれ」とあつて、彼方此方の數多の人々から引張られて麻衣にこいふ。(大幣)は頭附の説に、祝するに陰陽師の

いでござんしよの、「痛むか痛まぬか切は見ず、大方な事問はつしやれ、ア小氣味の悪い女郎じや」と、さすがの武士も打てぬ顔、「エ、春様、初對面のお客にあんまりな挨拶、ちつと氣を變へ、どりや此方の人尋て來て酒にせう」と、立出る門は宵月の、影傾きて雲の脚、人足薄く成にけり、天満に年経る、千早ふる、神にはあらぬ紙様と世の鰐口に乗るばかり、小春に深く大幣の腐り合ひたる御注連繩、今は結ぶの神無月、堰かれて逢はれぬ身と成果て、あはれ逢ふ瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と、名残の文の言ひ交はし、毎夜の死覺悟、魂抜けてとばくうか／＼身を焦がす、煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と耳に入るよりサア今宵と、覗く格子の奥の間に客は頭巾を頤の、動くばかりに聲聞えず、可愛や小春が燈に、背向けた顔のあの瘦せた事は、心の中は皆己が事、爰に居ると吹込んで、連れて飛ぶなら梅田か北野か、エ、知らせたい呼たい」と、心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殻の、格子に抱附あせり泣、奥の客が大欠の思ひの有女郎衆のお伽で氣がめいる、門も静かな、端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さふ、サアござれ」と連れ立出れば南無三寶と、格子の小陰に肩身を窄め隠れて

持ちたる串にさしたるしでなり、祓果てぬればこれ  
を各引寄せつつ撫づるものなり、とある。

○腐り合ひ 鍵り合ひの義。つながり合ひ。男  
女情交を結び合ひ。

○今は結ぶの神無月 この所は大頭の舞の歌  
詞に據つた。

○神無月 神嘗月の義。舊曆十月の稱。

○逢ふ瀬 (見索引)

○煮賣屋 菓着なごを煮て賣り、食事なごすま  
させる下等な飲食店。

○サア今宵と サア今宵情死と覺悟し。

○格子 女郎屋(置屋)の表作(おもてづくり)は格  
子になつてゐる。

○頭巾を隨の動く 頭巾を隨にあて、隨の動く。  
とある。

○燈に背向けた顔のあの瘦せた事わい  
白居易の詩句に、「映々殘燈背影影」。

○梅田 大阪の梅田は普火猪場・菓所のあつた地  
なれば、この所で情死しようと思ふのである。

○北野 大阪の北野も菓所のあつた地。この文  
の「吹き」「飛ぶ」「梅田」「北野」(天満宮所在地)は、  
飛梅の縁によつた語である。

○空蟬の 現身(うつし)の意から身の沈詞と  
なる。又蟬のごにもいふ。よつて蟬の拔殻に、強  
は身から抜け出てゐる意をいひかけた。

○南無三寶 失敗した時にいふ語。三寶(佛法  
僧)に安んずるより起る。この文は、治兵衛が、  
二に居てはよくならぬ、自分に威びたのである。

○心中 情死。

聞とも内には知らず、なふ小春殿、宵からの素振、詞の端に氣を附れば、花車が  
咄の紙治とやらと、心中する心と見た、違ふまい、死神附いた耳へは、意見も道

理も入まじとは思へども、さりとは愚痴の至り、先の男の無分別は恨みず、一家  
一門其方を恨憎し、萬人に死顔晒す身の恥、親は無いかも知らねども、若し左

れば不孝の罰、佛は愚か地獄へも温かに、二人連れでは落られぬ、痛はしとも笑  
止とも一見ながら武士の役、見殺しには成難し、定て金づく、五兩十兩は用に立

ても助たし、神八幡侍 冥利他言せまじ、心底残さず打明けや、囁けば手を  
合せ、ア、忝い有難い、馴染み誼みも無い私、御誓言での情のお詞涙がこぼ

れて忝い、ほんに色外に顯るでござんする、いかにも紙治様と死ぬる約束、  
親方に堰かれて逢ふ瀬も絶へ、差合ひありて今急に請出す事も叶はず、南の元の

○さりとは 情死するにあつては。

○愚か おろそか(疎)の義。佛に救はれぬことはいふまでも  
ないの意。

○温かに ぬくぬくと。うらやましく。近松作十吉  
野都女補に「うぬらが様なる不忠の臣、あた、かな、用ひられ  
んや」。

○笑止 いたはしいこと。(見索引)

○いちげん 初見。初対面。

○神八幡侍冥利 侍が僞るに於ては神八幡の印を受け、冥  
冥の加護利益りやくくに盡きるの意で、武士が自誓の詞。

○色外に顯る 「思内にある色外に顯る」この語によつた。  
この語は謡曲「熊野」・「松風」などにも見えてゐる。

○南の元の親方 大阪島の内道頓堀の風呂屋に湯女(ゆめな)  
となつて勤めてゐた時の抱主。

○主 紙帯をさす。

○一分 面目。

○敢ない はかない。

○南邊 大阪島の内。

○袖乞 乞食。物乞ひ。

○非人 人中に齒せざる人の義か。乞食又は夜廻り、路傍の興行などをなして生活し、公役としては捕手の配下に屬して罪人逮捕に助力し、牢番・罪人引廻しの職務などを勤め、死刑執行の時には、其の雜役に従つた。明治四年八月非人の稱を廢されて平民となる。こゝは乞丐の能をいふ。

○水臭い 關心がある。情愛深い。

○木から落ちたる 「木から落ちた猿」の諺による。頼む所を失つて詮方なきに喩ふ。「文選」西都賦に「猿狖久木」。

○かこち泣 歎いて泣くこと。

親方と爰こゝとに、まだ五年有年あるとしの中、人手に取られては私は固かたより主ぬしは猶なほ一分いちぶ立たず、いつそ死んでくれぬか、ア、死にましょと引ひくに引ひかれぬ義理詰ぎりづめにふつと言いひ交かはし、首尾しゆびを見合せ合圖あひづを定め、抜ぬけて出でよ抜ぬけて出でよと、いつ何時たどときを最期さいごとも其日そのひ送おくりの敢あへない命いのち、私わたくし一人を頼たのみの母様ははさま、南邊みなみに賃仕事ちんじごとして裏屋住うらやま、死しんだ跡あとでは袖乞そでこひ非人ひにんの飢死うへじもなされうかと、是これのみ悲かなしさ私わたくしとても命いのちは一いつ、水臭みずくさひ女むすめと思召おぼしめす恥はづかしながら、其恥はづかを捨て、死しにとも無いが第一ちひ、死しなずに事ことの濟すむ様にどうぞ「頼たのみやす」と、語かたれば頼うなづく思案顔しあんがほ、外そとにははつと聞驚きおどろく、思おもひがけなき男心おとここころから落おちたる如ごとくにて、氣きも急せき狂くるひ「扱さては皆嘘うそか、エ、腹はらの立たち、二年にふたとしといふ物化ものがたされた、根性腐こんじやうくさりの狐きつねめ、踏込ふんこんで一打ひとうちか面恥つらばはか、せて腹癒いよか」と、切齒はきりきり／＼口惜くちあし涙なみだ、内うちに小春こはるがかこち泣なみ、卑怯ひけつな頼事たのながら、お侍様ざむらいさまのお情なさけ、今年中來春こととせ二三月ふたつきの頃迄ころ、私わたしに逢あふて下くだんして、彼かの男おとこの死しに、來くる度たび毎ごとに、邪魔じやまに成なつて期きを延のばし／＼、自まのから手てを切きらば、先まきも殺ころさず私わたしも命助いのちたすかる、何なんの因果いんぐわに死しる契約けいやくしたことぞ、思おもへば悔くやしうござんす」と膝ひざに、凭もたれ泣なみだり有あり、一ひとム、聞届きとどけた思案有しあんあり、風かぜも來くる人ひとや見みる」と、格かた子の障しやう子ごばた／＼と、立聞治たちきんぢ



○賣物 成笑婦。店屋着てんやものじもいふ。  
○ど性骨 根性魂たまじ。こは語意を強める時に添はる接頭語。

○巾著切り 掏摸「すり」。又淫賣婦を巾著といはは、この二つの意がかかつて、罵る語氣鋭い。

○拜む囁く 呼えるさま。「拜む囁き」と書かない所に、一々見る有様が獨立して力強く胸に響く。さすがは東林子非凡の筆。「ほえる」は泣きわめくをいふ。

○關の孫六 美濃國關の刀匠兼元をいひ、其の人の作の刀。兼元は孫六と稱し、赤坂關の一派で、明應・永正年間の人であるともいふ。二世兼元も孫六と稱し、初代兼元の子で美濃赤坂に住す。三世兼元も孫六と稱し、二世兼元の子で美濃關に住し、天文・永祿年間の人。近松の當時は關の孫六が流行したものと見え、「女大名丹前殿」の中にも出てゐる。

○がんど搦み 紺網の類を打ちちがへて堅く編めること。蓋し「がんど」は「がんどじやう」強盛の詠か。但し雁字、又は岩丈、岩乘、岩曼などの説もある。

○身次第にして 我の仕打に任して。

○手枷 「てかし」の轉。手にかけて動けぬやうにする刑具。格子に締括られた事をいふ。

○煩惱に繋がるる犬「煩惱の犬」の語による。執心の離れ難きを、犬が人につき来るに喩へていふ。

兵衛が氣も狂亂「エ、さすが賣物安物め、ど性骨見違へ、魂を奪はれし巾著切め、切ふか突かふかどう障子に映る二人の横顔「エ、くらはせたい踏みたい、何吐すやら領き合、拜む囁く哮へるさま、胸を押へ摩つても慄へられぬ堪忍ならぬ」、心も急に關の孫六一尺七寸拔放し、格子の狭間より小春が脇腹、爰ぞと見極めると突くに座は遠く「是は」とばかり怪我もなく透さず客が飛び掛り、兩手を掴んでぐつと引入、刀の下緒手ばしかく格子の柱にがんど搦みしつかと締め附「小春騒ぐな、覗くまいぞ」といふ所に亭主夫婦立歸り「是は」と騒げば「ア、苦しくない、障子越に拔身を突込暴れ者、腕を障子に括り置、思案あり細解くな、人立あれば所の騒ぎ、サア皆奥へ、小春おじやや行て寝よう、「あい」とは言へど見知り有脇差の、突かれぬ胸にはつと貫ぬき、「酔狂の餘り色里には有習ひ、沙汰無しに往なして遣らんしたら、ナア河庄さん、私やよさそうに思ひやす」、「いかないかな身次第にして皆這入りや、小春此方へ」と奥の間の影は見ゆれど括られて、格子手枷にもがけば締め、身は煩惱に繋がる、犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙絞り、泣こそ不便なれ、ぞめき戻りの身すがら太兵衛、「扱こそ河庄が格子に

○ほざく 「言ふ又は爲る意に賤しんでいふ語。近松作「兩性並合戦」千里が竹に「しほらしい事はざいたり」。

○生拘摸 「生(いき)は人を叱り又は罵る時に添へていふ接頭語。「生女郎(いきめらう)」「いき盗入」の類。

○どう拘摸 「どうは他語と熟語となつて其の意を強める接頭語。「どう因果」「どう山伏」の類。

○獄門め 獄門にかけられるべき奴め。

○姫柁 「ほはひた(頼術)といふの類。

○踏さがされる 踏散らされる。「さがす」は散す意。

○奴原 奴ら。奴原の原は、殿原などの原と同じ。

○兄じや人 兄者人と書けど、もとは「兄ぢや人」である。兄。兄上。

○おつかかる おしかかる(押掛)の音便。近づくと強めていふ。將に及ぼうとする。

○我 汝が。

○親子 親戚の意。近松作「夕霧阿波鳴渡」に「大身の武家に親子もあるぞいの」。「無言集賢」に「武藏の忍のあたり親類を親子といふ」。

○鯉鱒も無い 鯉鱒(にべ)は鯉(にべ)の鯉(にべ)え(か)から製する鱒(にべ)にかはをいひ、粘着力頗る強い。「にべも無い」とは粘気もない義、情愛なきをいふ。即ち理性一塵張りなるをいふ。

立たは治兵衛めな、投てくれん」と、襟搔掴んで引擔く「あ痛々々」、「あ痛とは卑怯者、ヤアこりや縛り附られた、扱は盗みほざいたな、ヤ生拘摸めどう拘摸め」とてはたとくらはせ、「ヤ強盗めヤ獄門め」とては蹴飛ばし、「紙屋治兵衛盗みして縛られた」と、呼ばはり喚げば行交ふ人邊り近所も駈集る、内より侍飛んで出、「盗人呼ばりは汝が、治兵衛が何盗んだサア吐かせ」と、太兵衛を搔掴み土にぎやつとのめらせ、起されれば踏附踏のめし、引捉へて「サア治兵衛、踏んで腹癒よ」と足本に突附るを、縛られながら頼柁、踏附、踏さがされて土まぶれ、立上つて睨め廻し、「邊りの奴原よふ見物して踏ませたナア、一々に面見覺えた、返報する覺へて居れ」と、滅らず口にて逃出す、立寄る人々どつと笑ひ、「踏まれてもあの願、橋から投げて水食らはせ遣るな」と追駈け行、人立透けば侍立寄つて縛り目解き、頭巾取たる面體、「ヤア孫右衛門兄じや人、アツア面目なや」とどうと坐し、土に平伏し泣居たる、「扱は兄御様かいの」と、走出る小春が胸座とて引据る、「畜生め、狐め、太兵衛より先うぬを踏みたい」と足を上げれば孫右衛門、「ヤイ~~~~、其痴呆から事起る、人を誑すは遊女の商賣、今日に見え

○氣扱ひ 氣がねしての扱扱ひ。

○包まるる 強くいふ時は往々終止法に連體形を用ひる。その例は他にもある。疑問文の終止法に連體形を用ひる所以も、強くいふ爲である。「包まるる」は、ここで終止法になつてゐるのである。

○行く先が立つ 行く先に翻的が立つて、翻の矢の通る道筋を歩まねばならぬといふ義。八方塞がりて、ろくな事はないとの意。「當世誰が身の上第二に、「阿房勢に合うて行先を立てたる如くなれば、うろたへ廻り。「色箱編百人後家」に「阿波に吹く風は渡岐ミやら、行くさき、目的立つるが如し、これ兩親の翻なり」。

○此亭主 河庄の亭主。この文は、孫右衛門が河庄と話し合つて工夫しの意。されは孫右衛門のした事は、河庄は既によく知つてゐたのである。

○心中よし この言は太兵衛も言うてゐる。こゝは皮肉の意をも含んでゐる。

○祭の練衆 大阪藩社の祭禮には練衆を出す。

就中康原社・天満宮等の御祝の練衆は殊に盛んなもので、鎧兜を着込だ、大小や旗印等を差した武者の假裝行列などがあつた。之を祭の練衆といふ。

○藏屋敷 藩主などが其の藩の物産を賣捌く爲に、大阪では中之島・土佐堀・江戸堀などに屋敷を置いた。其の屋敷を藏屋敷といひ、其の役人を藏役人といつた。

○小詰役者 小部屋に詰込んでゐる端役者（はやくしや）をいふのが轉じて、下廻りの役者（併優）をいふ。

たか、此孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る、二年餘りの馴染みの女、

心底見附ぬ狼狽者、小春を踏む足で、うろたへた汝が根性をなせ踏まぬ、エ、是非もなや、弟とは云ひながら三十に押掛り、勘太郎お末といふ六ツと四ツの子の親、

六間口の家踏みしめ、身代潰る、辨へなく、兄の意見を受くる事か、舅は叔母、

姑は叔母じや人親同然、女房お三は我爲にも従兄弟、結び合へ、重々の縁者

親子中、一家一門參會にも、汝が曾根崎通ひの、悔みより外餘の事は何も無ひ、

いとしひは叔母じや人、連合ひ五左衛門殿は鰐膠もない昔人、嗅の甥子に倒され

娘を棄てた、お三を取返し、天満中に恥か、せんと腹立、叔母一人の氣扱ひ敵

になり味方になり、病になる程心を苦しめ、汝が恥を包まる、恩知らず、此罰た

つた一ツでも行先目的が立、斯くては家も立まじ小春が心底見届け、其上の一思

案叔母の心も休めたく、此亭主に工面し、汝が病の根源見届くる、女房子にも見

替へしは尤、心中よしの女郎、ア、お手柄、結構な弟を持、人にも知られし粉

屋の孫右衛門、祭の練衆が氣違か、遂に差さぬ大小打込み、藏屋敷の役人と、小

詰役者の眞似をして、馬鹿を盡した此刀、棄所が無いわい、小腹が立やら可

○袖になし 粗略になし。(これと反對に、心を留め丁寧にもてなすを「身にあしらふ」といふ。)

○家尻切り 家後(「やじり」)を切りそれより圍入して盜賊をはたらくこと。盜賊。

○起請 事を發起して、神佛の照覽を請願する意。この文は天籟約束をしたことを神佛に誓を立て、それを牛玉の誓紙に記した起請文をいふ。後文にある「熊野牛玉の村鳥」の註を見よ。

○侍冥利 (既出)

○商ひ冥利 商人の自誓の詞。(自誓の詞を、その者の身分又は職業につけて、「侍冥利」「商ひ冥利」「傾城冥利」などといふ。)

○女房限つて 女房にも嚴禁して。

○私が立ちます 私の面目が立ちます。

○片時も彼奴が云々 語に「可憂さ餘つて惜さが百倍する」といふ。この文、その心がよく寫してある。

○おだんだ踏み 「おだたらふみ」(地聲踏踏)の歌。身をもがきながらせか／＼足踏みし。

笑<sup>か</sup>しいやら、胸<sup>むね</sup>が痛<sup>いた</sup>い」と齒<sup>は</sup>ぎしみし、泣<sup>な</sup>顔<sup>が</sup>隠<sup>かく</sup>す澁<sup>しぶ</sup>面に小春<sup>こはる</sup>は始<sup>し</sup>終<sup>しゅう</sup>咽<sup>む</sup>せ返<sup>かへ</sup>り、「皆<sup>みな</sup>お道理<sup>だうり</sup>」とばかりにて詞<sup>ことば</sup>も、涙<sup>なみだ</sup>にくれにけり、大<sup>おほ</sup>地<sup>ち</sup>を叩<sup>たた</sup>いて治<sup>ち</sup>兵<sup>べい</sup>衛<sup>ゑ</sup>、過<sup>あや</sup>つたく、兄<sup>あに</sup>じや人<sup>ひと</sup>、三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>先<sup>まへ</sup>よりあ<sup>あ</sup>の古<sup>ふる</sup>狸<sup>ねこ</sup>に魅<sup>ひ</sup>られ、親<sup>おや</sup>子<sup>こ</sup>一<sup>いち</sup>門<sup>もん</sup>妻<sup>さい</sup>子<sup>し</sup>迄<sup>まで</sup>袖<sup>そで</sup>になし、身<sup>み</sup>代<sup>だ</sup>の手<sup>て</sup>縫<sup>ぬ</sup>れも、小<sup>こ</sup>春<sup>はる</sup>とい<sup>い</sup>ふ家<sup>や</sup>尻<sup>ぢり</sup>切<sup>ぎり</sup>に誑<sup>た</sup>らされ後<sup>ご</sup>悔<sup>くわい</sup>千<sup>せん</sup>萬<sup>まん</sup>、ふつ、り心<sup>こころ</sup>殘<sup>のこ</sup>らねば尤<sup>もつとも</sup>足<sup>あ</sup>も踏<sup>ふ</sup>込<sup>こ</sup>まじ、ヤ<sup>や</sup>イ狸<sup>た</sup>ぬめ、狐<sup>きつね</sup>め、家<sup>や</sup>尻<sup>ぢり</sup>切<sup>ぎり</sup>め、思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>つた證<sup>せう</sup>據<sup>こ</sup>是<sup>こ</sup>見<sup>み</sup>よ」と、肌<sup>は</sup>に懸<sup>か</sup>けたる守<sup>まも</sup>り袋<sup>ふくろ</sup>、一<sup>ひと</sup>月<sup>つき</sup>頭<sup>がしら</sup>に一枚<sup>まい</sup>づ、取<sup>とり</sup>交<sup>か</sup>はしたる起<sup>おき</sup>請<sup>せう</sup>、合<sup>あ</sup>はせて二<sup>に</sup>十<sup>じゅう</sup>九<sup>く</sup>枚<sup>まい</sup>尻<sup>し</sup>せば戀<sup>こひ</sup>も情<sup>なさけ</sup>もない、こりや請<sup>うけ</sup>取<sup>と</sup>れ」とはたと打<sup>う</sup>つ附<sup>つけ</sup>、「兄<sup>あに</sup>じや人<sup>ひと</sup>、彼<sup>あいつ</sup>奴<sup>やつ</sup>が方<sup>かた</sup>の我<sup>われ</sup>らが起<sup>おき</sup>請<sup>せう</sup>數<sup>かず</sup>改<sup>あらた</sup>め請<sup>うけ</sup>取<sup>と</sup>て、こなたの方<sup>かた</sup>で火<sup>か</sup>にくべて下<sup>くだ</sup>され、サア兄<sup>あに</sup>貴<sup>き</sup>へ渡<sup>わた</sup>せ」と涙<sup>なみだ</sup>ながら投<sup>なげ</sup>出す守<sup>まも</sup>り袋<sup>ふくろ</sup>、孫<sup>ひい</sup>右<sup>ふみ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>押<sup>お</sup>開<sup>ひら</sup>き、「一<sup>ひい</sup>二<sup>ふ</sup>三<sup>み</sup>四<sup>よ</sup>、十<sup>じゅう</sup>廿<sup>に</sup>九<sup>く</sup>枚<sup>まい</sup>數<sup>かず</sup>揃<sup>そろ</sup>ふ、外<sup>ほか</sup>に一<sup>いち</sup>通<sup>つう</sup>女<sup>にょ</sup>の文<sup>ぶん</sup>こりや何<sup>なん</sup>じや」と、開<sup>ひら</sup>く所<sup>ところ</sup>を「ア、そりや見<sup>み</sup>せられぬ大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>の文<sup>ぶん</sup>」と、取<sup>とり</sup>附<sup>つけ</sup>を押<sup>お</sup>退<sup>の</sup>け、行<sup>い</sup>燈<sup>とう</sup>にて上<sup>う</sup>書<sup>し</sup>見<sup>み</sup>れば「小<sup>こ</sup>春<sup>はる</sup>様<sup>さま</sup>參<sup>ま</sup>る、紙<sup>かみ</sup>屋<sup>や</sup>内<sup>うち</sup>三<sup>さん</sup>より」、讀<sup>よ</sup>みも果<sup>は</sup>てずさあらぬ顔<sup>かほ</sup>にて懐<sup>くわい</sup>中<sup>ちゆう</sup>し、「是<sup>こ</sup>小<sup>こ</sup>春<sup>はる</sup>、最<sup>さい</sup>前<sup>ぜん</sup>は侍<sup>さむらい</sup>冥<sup>めい</sup>利<sup>り</sup>、今<sup>いま</sup>は粉<sup>こな</sup>屋<sup>や</sup>の孫<sup>ひい</sup>右<sup>ふみ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>商<sup>あき</sup>冥<sup>めい</sup>利<sup>り</sup>、女<sup>にょ</sup>房<sup>ぼう</sup>限<sup>かぎ</sup>つて此<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>見<sup>み</sup>せず我<sup>われ</sup>一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひと</sup>披<sup>ひ</sup>見<sup>けん</sup>して、起<sup>おき</sup>請<sup>せう</sup>共<sup>ども</sup>に火<sup>か</sup>に入<sup>い</sup>る、誓<sup>せい</sup>文<sup>ぶん</sup>に違<sup>ちが</sup>ひはない」、「ア、忝<sup>かたじけ</sup>ない、それ<sup>それ</sup>で私<sup>わたし</sup>が立<sup>た</sup>ちます」と、又<sup>また</sup>伏<sup>ふし</sup>沈<sup>しん</sup>めば、「ハア〜、うぬが立<sup>た</sup>つた立<sup>た</sup>たぬとは、人

○しなしたり つまらぬ事を爲成したの意。し  
まつた事をし。

○むごらしき 「むごらしき姿なり」の略。

○無心中か心中か 前文太兵衛の詞に、小春  
を評して「心中よし意氣方よし云々」見え、又孫右  
衛門の詞にも「女房子にも見替へしは尤、心中よし  
の女郎」とある。小春無心中ならんや。

○誠の心は誰が見ぬ 小春の眞實  
の心は、お三に返事した手紙、それはお三の持てる  
其の一筆、それには小春の心の奥底が述べられてゐ  
るが、それは奥深く認められて、お三より外は誰も  
其の文を見ぬとの意。

○誰がふみも見ぬ戀の道 「金葉集」雜上郡、  
小式部内侍の歌句に「まだふみも見ぬ天の橋立」。

### 中之卷 (紙屋治兵衛宅)

#### 登場人物の主な者

紙屋治兵衛 (大阪天満宮前町  
紙商。二十八歳)  
三郎 (治兵衛の丁稚)  
五左衛門 (お三の父)

心中天の網嶋

お三 (治兵衛の妻)  
玉 (治兵衛宅の下婢)  
お三の母 (治兵衛の叔母。五十六歳)  
粉屋孫右衛門 (商人。治兵衛の兄)  
勸太郎 (治兵衛の子。六歳)  
お末 (治兵衛の子。四歳)

がましい、是兄じや人、片時も彼奴が面が見ともなし、いざござれ去ながら、此  
無念口惜しさどうも堪らぬ今生の思出、女が面一ッ踏む、御免あれ」とつと寄  
つてじたんだ踏み、エ、しなしたり、足かけ三年戀しゆかしかもいとし可愛も、今  
日といふ今日たつた此足一本の暇乞」と、額際をはつたと蹴て、わつと泣出し  
兄弟連れ、歸る姿もいたく敷跡を見送聲を上げ、歎く小春もむごらしき、無心  
中か心中か、誠の心は女房の其一筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道別れて、こそ  
は歸りけれ

## 梗概

いつの間にか十夜の晩が来た。紙屋治兵衛の宅の前は寺参りの人通りで賑はつた。小春との昔を忘れられぬ治兵衛は、その賑やかなのを煩がり、火燵に足を伸べて轉寐してゐる。利發で氣立ての好い妻お三は二兒の世話を焼き、下婢玉と愚な丁稚三五郎とを使つて家事を切廻してゐる。折から玉が、「叔母様と粉屋の孫右衛門様とが連立つて來られます」と知らせたので、お三は急に治兵衛を起した。治兵衛はつと跳起き、帳引寄せ算盤を弾いて、家業を勵んでゐるやうに見せた。

やがて叔母は孫右衛門と共に入り來り、「昨夜念佛講に行つて、『曾根崎の遊女小春が請出されるさうなが、世智辛い世の中でも金と痴漢は澤山な』との取沙汰を聞いて來た。連添ひの五左衛門は堅氣の人で、『小春を請出す者は治兵衛めに違ひない。私の娘は彼の妻にはして置けぬ、取戻す』とて出懸けられる處を、『まあ待つて下さい』と引留め、やつと宥めて來た」とて、孫右衛門と共に治兵衛に痛切な意見をした。治兵衛「その請出す者は私でない。兄様も御存じの太兵衛めでありませう」とて、極力誤解を辯疏した。お三も「夫は改心しました。こればかりは夫の言葉に毛頭嘘はありません、證據には私が立ちます」といふ。叔母も孫右衛門も、「さてはさうか、それで安心した」と喜ぶ。叔母は「いつその事に五左衛門殿にも納得さす爲に誓詞を書け」といふ。そして治兵衛が、小春と縁切るといふ自筆の起請文を受取り、懐に入れて去る。

治兵衛は兩人の歸るを見送つた後、ころりと再び火燵蒲團の中にもぐり込んだ。治兵衛が曾根崎通ひを始めてからここに二年間、夫に對つてつひぞ嫌な顔を見せなかつたお三は、夫のあんまりなこの行爲を怨み、夫から袖にされた長い間のうら悲しい衷情を哀訴した。其の聲は哀切を極め、蒼ざめた顔には熱い玉の涙が流れてゐる。治兵衛も涙にくれ、「腐り女の小春に未練は夢にも無けれども、常々彼の言葉に、太兵衛に請出されては生きて居ませぬと言つたが、今ではそれも偽り。太兵衛が大阪中に己の悪口を觸廻るであらう。己の面目は丸潰れとなつた。それが悲しい」と泣入る。お三「はて小春さんがかね／＼さういうてゐたなら死にますわいな。私は一生言ふまいと思つてゐましたが、この儘で小春さんを死なせては私の罪も恐ろしい。身の大事を

打明けます。實は貴方が死ぬ氣が見えた故、小春さんに手紙を送り、「女はお互に思ひやりの心がありたいもの、どうぞ私の心を察して治兵衛を思ひ切つて下さい。夫の命を頼みます」と申しました。小春さんからその返事に、「お文を読んで感じました。私の身にも命にも替へぬ大切な殿なれども、引かれぬ義理合ひ思ひ切ります」と書いて來ました。賢い小春さんに不義理な心はありません。太兵衛とやりに添ひますものか、きつと死にますわいな。どうぞ助けて下さい。治兵衛「ハ、アそれで知れた。兄が小春から取戻してくれた私の起請文の中に、知らぬ女の文が一通あつた。それはお前の文であつたな。そんなら小春は死ぬぞ。さりとて助けようにも身請の新銀七百五十匁なくては叶はぬ。これがどうしやうもない」。お三「なんの七百五十匁、それは易い事」と、簞笥の抽斗を明け、「この包は新銀四百匁あります。岩國の紙間屋へ拂ふ銀なれども、それは兄様と相談してどうにか致します。残りの三百五十匁は著物を質に置けば濟む事」と、子供の著物を取交せて投出し、風呂敷に包んで三五郎に負はせ、「さあ著物を著替へて早うお行きなされませ」。治兵衛は妻の優しい心に感泣し、三五郎を連れて家を出ようとする。

折悪う五左衛門入り來り、この有様を見て烈火の如く怒り、治兵衛を痛罵し、懐中から治兵衛の起請文（叔母に與）を出し、引裂いて棄てた。そして治兵衛の謝罪を聽かばこそ、お三の離縁を迫り、お三の聽かぬを引立てる。この騒ぎに、眠つてゐた勘太郎・お末は目を覺して母を慕ひ、お三も夫を慕ひ二兒を慕うて泣入る。五左衛門は之を後目に懸け、お三を拉して去る。

評

治兵衛を中心として、其の肉親の者どもの心々に起る、憂慮・哀愁・忿怒・絶望などの高潮せる心持を流麗な筆で寫してある。其のゆかしさと果敢なさと頼もしさと悲しさとが讀者の胸を打ち、暫しは近松情調の魅力に陶醉するであらう。

○天満神の名を直に天神橋 天満天神てんまてんじんの名を取つて直に天神橋。「天神橋」は大川に架す。

○お前町 天満宮前町。

○營む業も紙見世 營む業も神を紙にとつて紙店につづけた。

○千早振 (既出)。振に輝るほむをいひかく。多くあるを急に輝る程あるといふ。

○神は正直 語。近松作「日本振袖始」にも「神は正直、鬼神とは横道なし」とある。

○しにせ 「爲似の義。父祖の家業を守り續けて行くこと。以て長く商賣をつづけることといふ。老練。

○十夜 (既出)。本曲上之巻に「十夜の内に死んだ者は佛に成るといひますが定かかない」とある、その時が来た。

○一締 紙の縁語。(半紙百帖を一締といふ)。

○市の側 大阪天満市、即ち天神橋北詰上上手より船田町までの密側をいふ。天神筋町の市場(青物などの市場がある)に對していふ。

○玉 下女の名。

○三五郎 丁種の名。

○阿房には何がなる 阿房ぐらゐつまらない者は無いとの意。

○辛氣 心のくさくして浮立たぬこと。氣を揉み憤懣すること。「辛氣な奴」とは、辛氣がらす奴との意。

中之巻

福徳に、天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神のお前町營む業も紙見世

に、紙屋治兵衛と名を附て千早振程買ひに来る、紙は正直商賣は所柄なり老舖

なり、夫が火燧に轉寐を枕屏風で風防ぐ、外は十夜の人通り見世と内とを一締に、

女房お三の心配り、日は短し夕飯時市の側迄使に行て、玉は何して居る事ぞ、此

三五郎めが戻らぬ事風が冷たい二人の子供が寒からふ、お末が乳の呑みたい時分

も知らぬ、阿房には何が成辛氣な奴じや」と獨り言、母様一人戻つた」と走り歸

る兄息子、ア、勘太郎戻りやつたかお末や三五郎は何とした、「宮に遊んで乳呑

みたいとお末のたんと泣きやりました、「そうこそ、こりや手も足も釘に成ッ

た、父様の寝てござる火燧へあたたつて暖まりや、此阿房めどふせう」と待かね店

に駈出れば、三五郎只一人のらくとして立歸る、こりや痴呆お末は何處に置いて

来た、「ア、ほんに何處でやら落してのけた、誰ぞ拾たか知らん迄、何處ぞ尋て



○宮 天満宮。

○たんと 「足たじりぬごの約。甚だしう。ひざく。(既出)

○釘になつた 鎌(かね)になるともいふ。冷えこじえた意。

○どうせう せうしたらよからう。

○のら〜 のらくら。

○落してのけた 落してしまつた。

○まで 器尾につけて意を強めるにいふ助詞。

○ろく 「まろく」(圓)の「ろく」である。まんろく。不都合のないこと。(見索引)

○覺える程 痛(いた)身にこたへて忘れられぬ程。

○母様と伯父様 機嫌が悪(わる)からう。お三の詞。「母様はお三の母をいふのであるが、「伯父様」はお三の義兄孫右衛門をいふ。義兄を伯父といふのは、我が兄が呼ぶ稱に従つたものである。

○おつとまかせ よしきたと感(か)じた時に發する語。よしきたとむつこいら。

○二壺天作五：七八五十六 割算及び掛算の九九を出せにいうた。そして叔母の年齢五十六にいひかけた。

○二分の勘太郎 二分の勘五つ(差額を生じる意)を勘太郎にいひかく。

來ませうか、「おのれまあ〜」大事の子を怪我でもあつたら打殺す」と、喚く所

へ下女の玉お末を背中に「おふ〜いとしゃ、辻に泣てござんした、三五郎守り

するならろくにしや」と喚き歸れば、「ヲ、可愛や〜、乳呑みたかろふの」と同

じく火燧に添乳して「是玉、其阿房め覺へる程くらはしや〜」と、言へば三五

郎かぶり振り、「いや〜たつた今お宮で蜜柑を二ツづ、食らはせ、私も五ツ食らふ

た」と、阿房の癖に輕口立苦笑ひするばかりなり、「ヤ阿房にかゝつて忘りよとし

た申々お三様、西の方から粉屋の孫右衛門様と叔母御様、連れ立てお出なされま

す、「是は〜そんなら治兵衛殿起せ」、「なふ旦那殿起きさしやんせ」、「母様と

伯父様が連れ立てござるげな、此短い日に商人が、晝中に寝た振を見せては又機

嫌が悪からふ、「おつとまかせ」とむつくと起き算盤片手に帳引寄せ、「二壺天作

五九引が三引六引が二引、七八五十六になる叔母打連れて孫右衛門内に入ば、「ヤ

兄じや人叔母様是はよふこそ〜先是へ、私は只今急な算用致しかゝる、四九卅

六匁三六が壹匁八分で二分の勘太郎よお末よ、祖母様伯父様お出じや煙草盆持て

おじや、「一三が三それお三お茶上ましや」と口早なり、「否々茶も煙草も飲みには

○結構 お人よし。「結構は阿房のうち」といふ語もある。

○愚な事 今更意見せよなごは愚の至り。  
○あたたかに 「あたたかに聞かうか」の略。すなはに聞きはせぬ。

○ぬくぬく 温々。づう／＼しく。近松作「女殺油地獄」に「ようも／＼此母をぬく／＼ごたましたな。」

○うぬ おの／＼の嘘。おのれ。そち。

○今橋 大阪市東區今橋の紙問屋。

○言やんな／＼ 申斐もないわいの 治兵衛の叔母の詞。

○白人 もと私娼の一種である。色を賣る女なれども、おほごに仕立てたごから、しろご即ち業人を白人と書いて、之をほくじんと言讀した名稱であるが、公娼の稱にも用ひるやうになつた。「好色敗善教」に娼の内にては女郎を總稱して白人といひである。

○深い 情交の深い。

○大盡 傾城買の上客。

○是沙汰 大變な評判。「沙汰」はうはさの意。

○賣買高い 當時は正徳元年鑄造の悪質な四寶銀がなほ通用してゐる時代であるから、金貨との兩替にも、物品の賣買にも、銀の利目が薄い爲に高額を要し、世智辛い世なるをいうたのである。近松作

來ぬ、はお三、いかに若いとて二人の子の親、結構なばかり見目ではない、男の性の悪いは皆女房の油斷から、身代破り女夫別れる時は男ばかりの恥じやない、少目を明いて氣に張を持ちやいの」と言へば「叔母様愚な事、此兄をさへ騙す不覺悟者女房の意見など温かに、ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬく／＼と騙し、起請まで返して見せ十日も立たぬに何じや請出す、エ、汝はなあ、小春が借錢の算用か、措き居れ」と算盤押取庭へくはらりと投棄たり「是は近比迷惑千萬、先度より後今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならでは闕より外出ぬ私、請出す事は扱置き思ひ出しも出ずにごそ」、「言やんな／＼夕べ十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満の深い大盡が外の客を追退け、すぐに其大盡が今日明日に請出すとの是沙汰、賣買高い世の中でも銀と痴漢は澤山など、色々の評判、此方の親父五左衛門殿常々名を聞抜いて、紀の國屋の小春に天満の大盡とは治兵衛めに極つた、噂の爲には甥なれど此方は他人娘が大事、茶屋者請出し女房は茶屋へ賣り居ろふ、著類きそげに疵附られぬ間に取返してくれうと、沓脱半分下りられしをなふ騒々しい神妙にもなる事を、明さ暗さ聞届けて上の事

「長町女服初」に「就買高い此節二貫目近い二十兩」であるもこの意である。

○きそげ 着殺しであつて、着物のいたみそけたもの、即ち敵衣である。「増補松の落葉」、大津退分繪師に衣はそけたまをかし。「着類着殺しは衣服類一切の意」「新版歌文」野崎村の段に「僅の田地着類着そけ、お光めが極符まで當代なし」。

○沓脱 沓脱石。

○神妙 程富「ぞんたう」。

○はみ返る 瘧。病再發する。ぶりかへす。「合類大節用集」肢脚門に「瘧はみかへす」字彙病重發也。

○光響道清 治兵衛の亡父の戒名。

○枕を上げ 枕から頭を上げるをいふ。枕から耳を上げるを「枕を敵つ」といふと同じいひ方。

○讀めた わかつた。合點がいつた。近松作國性形合職千里が竹に「讀めたりく」、さては異國の虎狩なり。

○身すがら (既出)

○佛でも 前文にある「結構なほかり見目(みめ)では無い」に際して。

○とてもに とてももの事に。いつその事に。

○かたむくろ かたくな。一方むき。近松作「曾我奔程山」に「かたむくろに曾我を引く已れは鼻負の引倒し」。蓋し「かた」は片で、片意地なごの片と同じく、「むくろ」は向の義か。

○即ち これは即ち。

と押有め、此孫右衛門同道した、孫右衛門の咄には今日は昨日の治兵衛でない、

曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞けば跡からはみ返るそも如何なる病をや、

其方の父御は叔母が兄、いとしや光響道清往生の枕を上、婿なり甥なり治兵衛が

事頼むとの一言は忘れねど、其方の心一ツにて頼まれし甲斐も無ひわいの」とかつ

ばと伏して恨泣、治兵衛手を打、ハア、讀めたく、取沙汰の有小春は小春なれ

ど、請出す大盡大きに相違、兄貴も御存じ先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛、

妻子眷屬持たぬ奴、銀は在所伊丹から取寄する、疾づくに彼奴めが請出すを私に

押へられ、此度時節到來と請出すに極つた、我ら存も寄らぬ事」と言へばお三も

色を直し、假令私が佛でも男が茶屋者請出す、其最負せう筈がない、是ばかりは

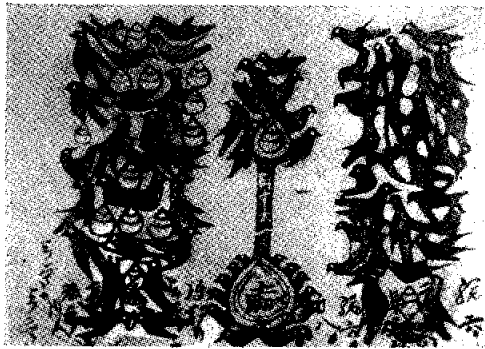
此方の人に徹塵も嘘はない母様、證據に私が立ます」と、夫婦の詞割符も合ひ

「扱はそうか」と手を打て叔母甥心を休めしが、ム、物には念を入れう事、まづ

まづ嬉しいとてもに心落著爲、かたむくろの親父殿疑の念なき様に誓詞書かす

が合點か、「何が扱千枚でも仕らふ」、「彌満足即道にて求めし」と孫右衛

○熊野牛王の村鳥 紀州熊野権現から出す牛王の起請紙には、鳥（熊野権現の神使）が七十五羽あつて六個の建字形をなし、其の間に寶珠の玉が點在し、もみ牛玉寶印と捺してあつた。「牛王の義に就いては體説あれども、蓋し牛玉を讀つたのであらう。牛玉は牛膽から得る最も貴重な薬で、之を印色とて符の上に印するより牛玉寶印といふたのであらう。又群鳥はこの誓紙の群鳥をいうた。



（書文山野高） 印寶王牛文請起

○比翼の誓詞 小春と治兵衛とが誓て互に夫婦となる起請文、熊野牛王の村鳥の誓紙に書いた事をいふ。比翼とは白居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥」とあつて、翼をならべて飛ぶ鳥の義、以て

門懐中より、熊野牛王の村鳥比翼の誓詞引替へ、今は天罰起請文小春に縁切思ひ切、偽り申に於ては上は梵天帝釋下は四大の文言に、佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名をしつかり、血判を据ゑて差出す、「ア、母様伯父様のお蔭で私も心落著、子中生しても遂に見ぬ固め事皆悦んで下さんせ」、「ア、尤々此氣になれば固まる商ひ事も繁昌しよ、一門中が世話かくも皆治兵衛為好かれ、兄弟の孫共可愛さ、孫右衛門おじや早う歸つて親父に安堵させたい、世間が冷へる子供に風引かしやんな、是も十夜の如來のお蔭是からなりともお禮念佛、南無阿彌陀佛」と立歸る心ぞ直に佛なる、門送りさへそこ〜に闕も越すや越さぬ中、火燧に治兵衛又ころり被る蒲團の格子縞、「まだ曾根崎を忘れずか」と呆れながら立寄つて、蒲團を取て引退くれば枕に傳ふ涙の瀧身も淫くばかり泣居たる、引起し引立火燧の櫓に突据へ、顔つく〜と打眺め、「あんまりじや治兵衛殿、それ程名残惜しくば誓詞書かぬがよいわいの、一昨年おとしの十月中の亥の子こに火燧明た祝儀とて、まゐ是爰で枕並べて此方こなた、女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか、二年といふ物巢守にして漸やうやう母様伯父様のお蔭で、睦むつじい女夫らしい寢物語もせう物と、樂たのしむ間もなく

夫婦の契の親密な事に喩ふ。「村鳥」から其縁語「比翼」に續けた。

○天開起請文 起請文は熊野半王の村鳥の縁紙の裏に書き、天開起請文之事と題して、起請を立てる事柄に就いて述記せざる由を記し、其の末に、上者苑天帝釋下者四大天王、可麗家御罰者也仍起請如件年月日、紙屋治兵衛血判宛名と書いたのである。

○四大 四大天王の略。持國天廣目天增長天多聞天の四天王をいふ。

○世話やく 世話やく。

○親父 五左衛門をさす。

○世間が冷える あたりが冷える。「世間」はあたりといふ程の意に用ひる。

○心ぞ直に佛なる 心が眞直まつすぐで、佛のやうな心である。

○格子縞 遊女屋の店は格子縞へである。それをさかして、曾根崎遊廓にいひつづけた。

○亥の子 亥猪とも書く。十月亥の日の稱。「僅言集覽」に「初亥は順業に十月初の亥の日右大臣女神の火桶にもちひ餅」をまじりて内裏の女房につかはす見えたり、禁中にて嚴重の餅さひひ、俗に亥猪と稱す、年中行事にへり、愚案、今俗十月初亥に火爐を閉く是より起、菓林子は火爐の明け初めを十月初亥日でなく中の亥日にせるは、「けいせい懸物翻」にも、「承平二年十月初の亥の日、民間には亥の子と名附け」というてある。

○このあたりの文、筆致の妙、比喩の妙を極め、お三の日頃の體情が極を切つたやうに奔り出る。其

ほんに酷いつれないさ程心残らば泣かしやんせ、其涙が蜷川へ流れて小春の

汲んで飲みやらふぞ、エ、曲も無い恨めしや」と、膝に抱き附身を投伏し口説き、

立て、ぞ歎きける、治兵衛眼押拭ひ、悲しい涙は目より出、無念涙は耳からなりと

も出るならば、言はずと心を見すべきに、同じ目よりこぼる、涙の色の變らねば、

心の見へぬは尤々、人の皮被た畜生女が、名残も絲瓜も何とも無い、遺恨有身す

がらの太兵衛、銀は自由妻子はなし請出さ工面しつれども、其時迄は小春めが太

兵衛が心に従はず、少も氣遣なされな假令此方さんと縁切れ、添はれぬ身になり

たりとも、太兵衛には請出されぬ若し金堰で親方から遣るならば、物の見事に死

んで見しよと、度々詞を放ちしがこれ見や退いて十日も立たぬ中、太兵衛めに請

出さる、腐り女の四ツ足めに、心はゆめく残らねども、太兵衛めがいんげん吐

の恨み心が餘強なく書き表されてゐる。

○菓守 卵が孵化しないで菓の中に取残されるものをいひ、よつて以て物の後に取残されることをいふ。橘守部編「俗語考」に「物の後(あと)に取残されるを菓守になる」といふは、鳥の子のかひわれずして外の菓立し跡に残るを菓守といふに準へて云也。

○曲も無い 愛想がない。面白くない。曲は曲折の義。謡曲「鉢の木」にあら曲もなや、よしなき人を待中して候ものかな。

○絲瓜も何とも無い 少しも意に介しない。諺に絲瓜の

皮さも思はぬ。絲瓜の皮は何の用もなきぬから、かくいふ。

○金堰 金力の爲に人の行動を拘束すること。

○四ツ足 畜生。

○いんげん 「ひげん(威嚴)に」んの添加した語。豪氣振ること。高樹。暴徒の意にいふ。近松作「源氏冷泉節」上之巻に「牛若とやら狼若とやらを舞に取たるいんげん」。「水木辰之助鏡振舞」に「道開様いんげんは仰せらるれ」と。

○行きついで 破派して、「損補無益集」に「いきつく川行就の意にて轉じて事の終るをいふ、身上がイキツク、命がイキツクなど云類なり」。

○まぶられ 「まもられの釋。見守られ」。

○胸が裂ける、身が燃える、口惜しい、無念な 「裂け」「口惜しうなさいはいはいで、一々切つた所に動作が一つ、獨立して力強い」。

○興醒め顔 興味の醒めた顔の義、轉じて當惑した顔附をいふ。

○無心中者 眞實の心なき者。

○大事 これは誠に祕密の大事である。これを打明けるは、お三が身を犠牲にして無事に解決をつけようと思ふ真心に出た。それが悲劇の導火線とならうとは思ひもかけなかつた。

○女は相身互ひ 女は互に同情の心あるべきかとの意の諷。近松作「天智天皇」にも「女は相身互ひぞや、誰しも好い男は持たたいもの」。

○我人 我人も誰でも。

○ひよん 凶な意にいふ。忌々「いま〜」し。凶變の義である。新井君美の説に「俗に物の不好事を凡てひよんな事と云ふ、凶字の華音ひよんと云ふよりいひ傳へて常語となれり」。

○敗亡 失敗。閉口。窮すること。

○新銀七百五十匁 新銀即ち享保銀は品質であつて銀八十分銅二十分の割合より成る。又四寶銀は品質であつて銀二十分銅八十分の割合より成る。故に新銀は四寶銀の四倍の價值がある。享保小判金

き、治兵衛身代行きついで銀に詰つてなんど、大坂中を觸廻り問屋中の附合

にも、面を守られ生恥かく胸が裂ける身が燃へる、エ、口惜しい無念な熱い涙血

の涙、粘い涙を打越へ熱鐵の涙がこぼるゝ」とどうと伏して泣ければ、はつとお

三が興醒め顔、ヤアウハウそれなればいとしや小春は死にやるぞや、「ハテサテ

なんば利發でもさすが町の女房じやの、彼の無心中者何の死なふ、灸をする薬吞

んで命の養生するはいの、「否そうでない私が一生言ふまいとは思へども、隠し

包んでむざ〜殺す其罪も恐しく、大事の事を打明ける、小春殿に無心中芥子程

もなければども、二人の手を切らせしは此三がからくり、此方様がうかうかと死ぬ

る氣色も見へし故、餘り悲しき女は相身互ひ事、切られぬ所を思ひ切夫の命を頼

む〜と播口説いた文を感じ、身にも命にも代へぬ大事の殿なれど、引かれぬ義

理合思ひ切との返事、私や是守に身を離さぬ、是程の賢女が此方様との契約違へ、

おめ〜太兵衛に添ふものか、女子は我人一向に思ひ返し無いの、死にやる

はいの〜、ア、ア、ひよんな事サア〜サどうぞ助けて〜」と、騒げば夫も

敗亡し、取返した起請の中知らぬ女の文一通、兄貴の手へ渡りしはお主から行た

一兩に新銀五十枚七分替と見て、新銀七百五十枚は金十四兩三分餘に當る。そして又四寶銀三貫匁に當る。

○四つ 四寶銀をいひ、正徳元年二月改鑄した懸寶銀貨で、寶字を四つ刻してある。

○才覺 算段の工面。

○仰山な 仰山なやうに言はれなくともよい事。

○綯交ぜ 無いに、數條の絲を交へてよれることをいひかく。

○岩國の紙 周防國岩國から古來半紙類の紙を産出する。之を岩國紙といふ。

○仕切銀 「しきりがね」といふ。買主が賣主に仕送りさせた品物の價を支拂ふ總金額。取引決算の拂渡金。

○談合 「だんがふ」といふ。濁つてはいはず。

○尾は見せぬ 因窮の正體は見せぬ。「日本水代藏」卷五に「世間に尾を見せず、狐よりは化けずまして世を渡る事人の身覺なり」。

○四々の壹貫六百匁 新銀四百匁を四寶銀に換算して壹貫六百匁になる。そして三貫匁には「ま壹貫四百匁」足らぬ。

○萬八丈 藍色(茶褐色)八丈の縮絹。藍色は元祿頃に流行した染色である。この文は鷲に飛びをいひかけて、「尾は見せぬ」といふ狐の縁語によつた。

○白茶 淡(うす)い茶色。

○兩面 表裏同様の絹なることをいふ。

文な、それなれば此小春死ぬるぞ、「ア、悲しや此人を殺しては、女同士の義理立たぬ先づ此方様早う行て、どうぞ殺して下さるな」と夫に縋り泣沈む、それとも何とせん半銀も手附を打、繋ぎ止めて見るばかり、小春が命は新銀七百五十匁呑まされば此世に留むることならず、今の治兵衛が四三貫匁の才覺、打碎いでも何處から出る、「なふ仰山なそれで濟まばいと易し」と、立ち簞笥の小引出明て惜しげも綯交ぜの、紐附袋押開き投出す一包、治兵衛取上「ヤ銀か、然も新銀四百匁、こりやどうして」と我置ぬ銀に目覺むるばかりなり、その銀の出所も御と談合して商賣の尾は見せぬ、小春の方は急な事そこに四々の壹貫六百匁、ま壹貫四百匁」と、大引出の錠明て簞笥をひらりと萬八丈、京縮緬の明日はない夫の命白茶裏、娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦さ、是を曲げては勘太郎が手も縮も無い袖無し、羽織も交せて郡内の始末して著ぬ淺黄裏、黒羽二重の

あるばかりなるに、その袖無し羽織を賣に入れては、著物にも類する事となり、さうにもならぬをいふ。

○郡内 甲斐國南・北都留郡を郡内といひ、その地から産出する縮絹の名。郡内は貞享初年から元祿・享保にわたつて最も流行し、晴の衣裳にした物で、かの二勝も八百屋お七も八百屋半兵衛の妻お千代もその最期に郡内縮を着てゐたといふ。

○「いつちやうら」「いつちやうらふ」(「極端」の「ふ」の省略された語で、こもし替なしといふ意が轉用されて、掛符なき最上等の品をいふ)

○蕪の葉ののきものかれも「この文」定紋丸に蕪の葉」といって、「増補松の落葉」卷五、蕪の葉の叫「落ちよ〜」と落して置いて、聲に蕪の葉「退き心云々」の句によつて、「退きも退かれも」といひ、離別できぬ夫婦仲の意にいうた。

○新銀三百五十匁 四寶銀では一貫四百匁に當る。

○太兵衛とやらに一分立て 太兵衛とやらに對してお前の面目を立て。

○飯炊 飯を炊く俵。「まき」(飯は「うま〜」(甘々)の小兒語)

◇嫉妬は女の最も悪い心と考へられてゐた江戸時代の道徳では、從順なお三ばかりも隠忍せねばならなかつたのである。

○間を渡し 熱湯を取替うて一時涼ぎをしの間に合はし。近松作「重井筒」に「此子に着せて間を渡したも、私が智恵ではあるまい」。

○足偏 「跡」の字は足偏なれはいふ。跡(あと)と跡事。「運歩色葉」に「足(あと)へん」。

○紗綾 葡萄牙語 Sida(西班牙語の seda) 布帛の義。卍の形をくづして迷ねた模様や、其他種々の模様を現はした純地(ぬめぢ)の組織物。

一ちやうら定紋丸に蕪の葉の、退きも退かれもせぬ中は内は裸でも外錦、男飾りの小袖迄浚へて物數十五色、内端に取て新銀三百五十匁、よもや貸さぬといふ事は無い物迄も有顔に、夫の恥と我義理を一つに包む風呂敷の中に、情を籠めにける、私や子供は何著いでも男は世間が大事、請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て、見せて下さんせ」と、言へども始終差俯向き、しく〜泣て居たりしが、手附渡して取止め請出して其後圍ふて置か内へ入るゝにしてから、其方は何となる事ぞ」と言はれてはつと行當りニアツアそうじや、ハテ何とせう子供の乳母か、飯炊か、隠居なりともしませう」とわつと叫び伏沈む、餘りに冥加恐しい此治兵衛には親の罰天の罰、佛神の罰は當らずとも女房の罰一つでも將來は好うない筈、赦して給もれ」と手を合口説き歎けば「物體ない、それを拜む事かいの手足の爪を放しても、皆夫への奉公紙問屋の仕切銀、いつからか著類を質に間を渡し、私が筆筈は皆明空ぞれ惜しいとも思ふにこそ、何言ふても足へんでは返らぬ、サア〜早ふ小袖も著替へてにつこり笑ふて行かしゃんせ」と、下に郡内黒羽二重縞の羽織に紗綾の帯、金拵への中脇差今宵小春が血に染むとは佛や知ろ



○中脇差 九寸五分までを小脇差、一尺七寸までを中脇差、一尺九寸までを大脇差といふ。

○毛頭巾 毛皮で作つた頭巾で、多く老人の着つたもの。

○南無三寶 事の心まがたがつて辛い時に、佛の救助を乞はうとして南無三寶と祈るより轉じて、失敗した、しまつたと思ふ時に發する語となつた。

○お歸りなされた 「お出でなされた」といふべきを顛倒狼狽してゐるによつてかくいうた。なほ「折も折好う」の語も、變想よく言はうとして、逆接を言つた狼狽さが見える。

○新地 會根崎新地。

○口に針ある 言語の中に險惡な意を含むをいふ。「唐書」に「世謂 林市口有釜腹有刺」。

○父様今日は云々 お三の詞。

○しほ 機曾「倭調架」に「物のほごよき時節をしほといふも、滴の指引より出たるなるべし」。

○發起心 發起善提心の略。證道欣求の志を發起する義。轉じて、迷を斷じ悔悟の心を起すこと。

○書出し 商人が得意先へ出す辨覽申請書の勅定書。

○梵天帝釋 誓詞の中にある語であつて、前文に見ゆ。

○去狀 離難狀。

し召さるらん、三五郎爰へ」と風呂敷包肩に負せて供に連れ、金も肌身にしつか  
と附立出る門の口、「治兵衛は内にお居やるか」と毛頭巾取て入を見れば、南無三  
寶舅五左衛門「是は扱、折も折好ふお歸りなされた」と夫婦は顛倒狼狽ゆる、三  
五郎が負ふたる風呂敷腕取でどつかと坐り尖り聲、「女郎下につからふ、聾殿是  
は珍しい上下著飾り、脇差羽織天晴れ好い衆の銀遣ひ、紙屋とは見へぬ、新地へ  
の御出か御精が出まする、内の女房いらぬ者お三に暇やりや、連れに來た」と口  
に針有苦い顔、治兵衛は兎角の言句も出ず、「父様今日は寒いに能ふ歩かしやんす、  
先お茶一ツ」と茶碗をしほに立寄つて、「主の新地通ひも、最前母様孫右衛門様  
お出なされて、段々の御意見熱い涙を流し、誓詞を書いての發起心、母様に渡さ  
れしがまた御覽なされぬか」、「ヲ、誓詞とは此事か」と懐中より取出し、「阿房  
狂ひする者の起請誓詞は方々先々、書出し程書き散らす、合點行かぬと思ひく  
來れば案の如く、此態でも梵天帝釋か、此手間で去狀書け」と寸々に引裂いて投  
棄たり、夫婦はあつと顔見合せ呆れて、詞もなかりしが、治兵衛手をつき頭を下  
げ、御立腹の段尤ともお詫申すは以前の事、今日の只今より何事も慈悲と思召し、

○非人（既出）  
○箸の餘り 食ひ残し。

○身上 身代。資産。

○著物 西鶴物などにも着物（きもの）を「きもの」と書いてある。

○ちんからり 内部に何物も無きをいふ。からつぱら。「好色三代男」卷三に「内証は虚（から）らに倉の内はちんからりとなりて」。

○ありたけこたけ 「ありたけはだけともいひ、同脚韻を重ねた語であつて、有る限り、残りずの意。

○繼切れ 關西地方では今もぬのきれをつぎきれといふ。

○明けて悔しき浦島の子 浦島太郎の傳説の故事に據つたもので、豫想したことがすつかり外れたことをいふ。謡曲「浦島」に「身に白鷺の玉手箱、明けて悔しき心な」。

○お山狂ひ 遊女の色香に迷うて遊興にうつつをぬかすこと。「お山」は遊女をいふ上方詞。

○生どう 拘摸 大盗人といふ程の意。「いけ」も「どう」も強く罵るに添はつた語。

○女房どもは：他人 我（五左衛門）が妻は治兵衛（叔母甥の關係あれども、我とは何の血縁も無く全くの他人）。

お三さんに添そはせて下くだされかし、たとへば治兵衛ちへいゑい乞食こじきひ非人ひじんの身みとなり、諸人しよじんの箸はしの餘あまりにて身命しんみやうは繋つぐとも、お三さんは屹度きど上に据すへ憂うれむ目見めせず辛つらい目させず、添そはねばならぬ大恩だいおん有、其譯わけは月日つきひも立私たちの勤ととめ方かた身上みづかみ持直もちちやうし、お目に懸かければ知る、事ことそれ迄までは目めを塞ふさいで、お三さんに添そはせて給たまはれ」とはら〜、こぼす血ちの涙なみだ疊たまひに、くひ附つき詫わびければ、非人ひじんの女房にようばうには猶なほならぬ去狀さりじやう書かけ〜、お三さんが持參ぢぜんの道具どうぐ衣い類るい數かず改あらためて封附ふうつけん」と、立寄たちよれば女房にようばう慌あはて「著物きものの數かずは揃そろふて有、改あらたむるに及あばぬ」と駈かけ塞ふさがれば突退つきのげぐつと引出ひきだし、コリヤどうじや、又引出ひきだしてもちんからり有ありたけこたけ引出ひきだしても、繼つぎ切れ一尺いちせきあらばこそ萬籠まなご・長持ながもち・衣裳いぢやうびつ櫃びつ、是程これほど空からに成なつたか」と舅しやうとは怒いかりの目玉めだまも据すり、夫婦ふうふが心こゝろは今更いまさらに明あけて悔くしき浦島うらしまの、こたがとん・火燒ひやう蒲團ふとんに身みを寄よせて火ひにも入いりたき風情ふうぜいなり、「此風このふう呂敷ろしきも氣遣きづかい」と引解ひきほどき取散とりちらし、さればこそ〜是も質屋しちやへ飛とばすのか、ヤイ治兵衛ちへいゑい女房にようばう子この身みの皮剥かわはぎ、其手そのてでおやま狂くるひ、生いどう拘摸くわもめ女房にようばう共どもは叔母甥おほいなれど此五左衛門このごさゑもんとはあかの他人たにん、損そんをせう誼えいみがな、孫右衛門そごゑもんに斷ことり兄あにが方かたから取返とりかへす、サア去狀さりじやう〜」と七重ななへの扉とら八重やちの鎖さ、百重ももへの圍かみは遁のがる、共遁とものがれ方かたなき手詰てづめの段だん、ヲ、治兵衛ちへいゑいが去狀さりじやう

○利運 有利のめり合はせ。轉じて去張の正し  
く有利なるを立(た)ててにこる(こと)。

○小腕 こ(が)ひな  
こうでうでくび。

○ヲ、いとしや云々 お三の詞。

○朝ぶさ 「あさぶら(朝物)を俗に女詞に「あさ  
ぶさ」という。朝食より前に肉食(あひたぐひ)す  
ること。「夏山雜談」に「御朝物は、餅(餅)糍(糍)菓子(菓子)の類  
を年中無難(無難)河内(河内)道喜(道喜)といふ御菓子師(御菓子師)より調進(調進)するこ  
なり、民間にても、朝食より前に何にても喰(喰)ふ事を  
朝ぶさといふはこの餘風(餘風)なるべし。」

○桑山 丸薬(丸薬)の名。小兒(小兒)の胎毒(胎毒)・腹痛(腹痛)その他諸症  
にきく良薬(良薬)としてその名高(名高)かつた。「攝陽群談(攝陽群談)十六  
に「桑山小粒(桑山小粒)葉生(葉生)那天(那天)王寺(王寺)町(町)瑞瑞(瑞瑞)寺(寺)にあり、  
桑山法印(法印)相傳(相傳)の小兒(小兒)萬病(萬病)の良薬(良薬)也」。詳しくは「近松  
語彙」を見。

○子を棄つる藪 「子を棄つる藪はあれど、身  
を棄つる藪はなし」の意(意)を應用(應用)してかくいうた。

○二股竹 相生(相生)の竹(竹)をいひ、以て夫婦(夫婦)の契(契)にい  
ふ。藪(藪)の語よりその縁語(縁語)「竹」をいひ、竹は長いもの  
故、「長き」につづけ、よつて以て永遠(永遠)の別れとなる  
にいひつづけた。

筆では書かぬは御覽せ、お三さらば」と脇差に手をかくる繩り附て「なふ悲しや、  
父様身に誤りあればこそ段々の詫言、あんまり利運過ました、治兵衛殿こそ他人  
なれ子供は孫可愛はござらぬか、私や去状は請取らぬ」と、夫に抱き附聲を上泣  
叫、ぶこそ道理なれ、「よいく去状いらぬ女郎め来い」と引立る、「いや私や行か  
ぬ飽きも飽かれもせぬ中を、何の恨に晝日中女夫の恥は晒さぬ」と泣詫ふれ共聞  
入す、「此上に何の恥町内一杯喚いて行く」と、引立れば振放し小腕取られよろよ  
ろと、よろめく足の爪先に可愛やはたと行當る、二人の子供が目を覺まし、大事  
の母様なせ連れて行く祖父様め、今から誰と寝よふぞ」と慕ひ歎けば「ヲ、いと  
しや、生れて一夜も母が肌を放さぬ物、晩からは父様と寝々しや、二人の子供  
が朝ぶさ前忘れず、必桑山飲ませて下され、なふ悲しや」と言捨つる跡に見捨  
つる子を棄つる、藪に夫婦の二股竹長き、別れと

## 下之卷（曾根崎新地大和屋の場。名残の橋盡し。網島大長寺の邊り）

### 登場人物の主な者

紙屋 治兵衛（大阪天満宮前町）  
紙商。二十八歳

春（曾根崎新地紀の國）  
屋の抱妓。十九歳

大和屋 傳兵衛（曾根崎新地）  
揚屋の主人

粉屋 孫右衛門（商人。治兵衛の兄）

勘

太

郎（治兵衛の子。六歳）

三

五

郎（治兵衛の丁稚）

下女・駕籠昇・花車・網島の漁父等

### 梗概

治兵衛は舅の爲に、愛人小春を請出す望を失ひ、また情愛深い温順な妻を奪はれて絶望の極に達した。彼の心は片時も早く現世の惱みから脱して他界に生れ變り、永遠に小春と連添ふを心頼みとした。小春も亦太兵衛の手から遁れて、愛人と來世の契を樂しまうとした。

十月十五日の月夜、治兵衛は曾根崎新地大和屋傳兵衛方に小春を招いて、最後の宴を張る。夜更けて上の町から下女が、駕籠昇を伴つて小春を迎へに來り、大和屋の内に入り暫らくして門口に出で、駕籠屋さん歸つて休んで下さい。小春さんは今夜ここにお泊りだ。花車さん、小春さんは太兵衛様に身請された故、預り者だから酒過させて下さるな」と語つて去る。

夜はしんくくと更け、霜白く地に敷き、燈火またたく頃、治兵衛をそつと起き、傳兵衛を呼んで諸雜費の金を渡し、「私はこれから買物の爲に京へ上る」とて、常談交りに別れを告げて去り、そつと引返して大和屋の格子戸に縋り内を窺ふ。この時兄孫右衛門は勘太郎・三五郎を連れ、治兵衛の身の上下を心配し、尋ねて大和屋に來る。之を見た治兵衛は、平蜘蛛のやうに身を壁につけて忍びながら其の恩を謝した。兄等の去つた後、小春は大和屋を脱出で、治兵衛と手を取交はし、足に任せて風寒い夜道を迎へる。

「名残の橋盡し」 治兵衛・小春の兩人はこの世の見納めに、道すがら梅田橋・綠橋・櫻橋・蜆橋・舟入橋・大江橋・難波小

橋・堀川の橋・天神橋・天満橋・京橋・御成橋を眺めて、無量の感慨に暮れながら網島大長寺のほとりに著く。折から生滅滅已と告げ渡る晨朝の鐘の響に促され、互に泣いて未來の契を約し、治兵衛は刀を抜いて死を待つ小春を刺殺し、自らは桶のまいた木に小春の抱帯を懸けて縊死を遂げた。時に治兵衛行年二十八歳、小春行年十九歳。網島の朝出の漁父がこの情死を見附けて騒ぎ立て、悲惨な戀物語となつて世に弘まつた。

## 評

天下何人も生を希うて死を詛ふ。その死を急がねばならぬ兩人の悲痛な心事を、麗しい筆で微細に描いてある。讀者はこの哀婉にして詩趣豊かな巢林子の愛の筆に泣かされるであらう。そして感情の激發から共に戀の犠牲となつた相愛の男女が、佛の手に救はれるを頼もしく思ふであらう。

近松は、狹斜の巻を背景として、遊女を説き情死を説けども、其の作品はいづれも、醜い現實を美化し詩化した神韻縹渺たる幻華藝術である。我等はこの藝術に接する時に於て、世智辛い現代生活の壓迫や、それに伴ふ醜惡な事象や、冷やかな理智の働から脱れて、詩の國に遊び得るのである。其の詩の國の中に活躍する遊女は、熱烈でそして純真な美しい心の保持者である。其の心から放つ芳ばしい香は、實に近松の把持する女性道德觀の一面である。

本曲は、華やかな享樂の場面や、しんみりとした憂愁の場面や、家庭の情態などが入交り、それ等にふさはしい背景と融合調和してゐる。其の中に活躍する各人物の性格や心境を書き分けて、義理人情を強調し、悲劇の大團圓に導いて無理がない。

余が深く巢林子を慕ふ所以は、彼が人々の美點を觀る深さと、それを觀る彼の美しい心が、流麗な詞章の中に現はれて、寧ろ醜い現實を藝術化し、心胸の向上を痛感させるからである。

下之卷

○爰を瀨にせん (二)なつまる所にせうを、流れる水の瀨にかけて、蜷川といひつづけたのである。「新古今集」夏歌の部、西行法師の歌に「聞かずとも爰をせむ杜禰、山田の原の杉のむらたち」。

○丑三つ 丑の時の第三刻であつて四更三點ともいひ、午前二時頃。「二」の文は、人若廻入た午前二時深更の頃の意。

○一字書き 字をくづして一筆ひびきでしやうに書き下すこと。一ふでがき。

○番太 番太郎の略。江戸時代自身番に附屬した小使であつて、夜廻などを勤めた下賤の者。

○ごよぎ 「じようじんさふらへ」御用心候の約略。夜廻番太郎が拍子木をうち、「ごよぎ」というて廻るのである。

○上の町 「掻波丸御目」に「上町」と呼ぶは、京橋より大坂に入る金城の邊より、西は東横堀まで高麗橋本町橋裏人等の堀筋を限りぬす。

○潜戸くわら／＼つつと入り 駕籠を門口に待たせて、潜戸をくわら／＼と並立して明けつと入り。

○借る 遊客をして相方の妓を見立てます爲、搦屋または色茶屋から妓を招待すといふ。こゝは、客に招かれてゐるのを借りて歸る意。

○三ツ四ツ挨拶 三口(みくち)四口(よくち)挨拶の詞句をいふ。

○花車 遊女屋の主婦をいふ。遊女を花に喩へて、花を廻すといふ歌よりの稱といふ。又異説もある。

戀情、爰を瀨にせん蜷川流るゝ水も、行通ふ、人も音せぬ丑三つ、空十五夜の月冨へて、光は暗き門行燈大和屋傳兵衛を一字書き、眠りがちなる拍子木に番太が足取千鳥足「ごよぎ」も聲更けたり、駕籠の衆いかふ更けたの」と、上の町から下女、迎ひの駕籠も大和屋の、潜戸くはら／＼つと入、紀伊の國屋の小春さん借りやんしよ、迎ひ」とばかりほの聞え、跡は三ツ四ツ挨拶の、程なく潜戸によつと出、小春様はお泊りじや、駕籠の衆直に休ましやれ、ア、言ひ残した是花車さん、小春様に氣を附て下さんせ、太兵衛様への身請が済んで、銀請取たりや預かり物、酒過させて下んすな」と、門の口から明日待たぬ、治兵衛小春が土になる種蒔散らして歸りける、茶屋の茶釜も、夜一時休むは八つと七つとの間にちら附短檠の、光も細く更くる夜の、川風寒く霜満てり、まだ夜が深い送らせましょ、治兵衛様のお歸りじや小春様起しませ、それ呼びませ」は亭主が聲、治兵衛

○種 基因の意。「土」「種」「蔕散らすいづれも縁詞。

○八ツ 午前二時。

○七ツ 午前四時。

○短檠 燈臺の丈け低くして二尺ばかりのもの。

○括られる 引止められて難れる事やでさね。

○往なしや 揚屋大和屋傳兵衛方に來てゐるのであるから、紀伊の關原に往なせよといふたのである。

○中拂 盆三歳末との中間、十月末の支拂。

○後の月見 九月十五夜。

○四ツ百五十日 四萬銀百五十日をいふ。新銀にすればその四分の一即ち三十七万九千五百に當る。

○西悅坊 當時は坊主が商家の使者となつたり、遊廓に出入して遊客に交はつたり、願入坊主的の仕事をする者が多かつた。索引にて「西念坊」を見よ。

○奉加 神佛に寄進する財物に我が財物を加へること。寄進。

○磯都が纏頭銀五 座頭(寄間である)の磯都に祝儀にやる小粒銀五つ。

○戻つて逢はう 京から戻つて又逢はう。

○侍なれば其儘切腹するであるの 刀は武士の魂としたもので、それを忘れては武士が立たない。假名手本忠臣蔵第七に、由良ノ助が刀を忘れたことを見へる條に「コレサまた爰に刀を忘れて置きました。ほんに誠に大馬鹿者の證據、たしなみの魂見まじしと見え、由良ノ助もあらう武士が大事の刀を忘れて置いた」とある。治兵衛が脇差を忘

る、それ故能ふ寐させて脱けて往ぬる、日が出てから起して往なしや、我ら今から歸ると直に、買物の爲京へ上る、大分の用なれば、中拂の間の合ふやうに歸るは不定、最前の銀で、其方の算用合も仕舞、河庄が所へも後の月見の拂といふて、四百五十日請取つて給らふしと、福島西悅坊が佛壇買ふた奉加、銀一枚回向しやれと遣つてたも、其外に懸り合はハアそれよ、磯都が纏頭銀五、是ばかりじや仕舞ふて寝やれ、さらば戻つて逢はふ」と、二足三足行より早く立歸り、「脇差忘れたちやつと、何と傳兵衛、町人は爰が心易い、侍なれば其儘切腹するであるの、我ら預かつて置てとんと失念、小刀も揃ふた」と、渡せば取てしつかと差、是さへあれば千人力、もふ休みやれ」と立歸る、追附お下りなされませ、能ふごさりまもそこ、に跡は櫃をこつとりと、物音もなく靜まれり、治兵衛はつくと往ぬる顔、又引返す忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて

るは、彼がなほ充分に死の覺悟がついてゐなく、うろたへてゐるのが見える。そして又讀者に脇差の印象を深からしめて、情死に脇差を用ひさせる爲の用意である。

○小刀 小柄。

○追附お下りなされませ 程なく京からお下りなさい。

○能うごさりま 「能うごさりました」の略。ようこそお出でになりました。





○固唾を吞んで臍腑を揉む 心をこめ氣をこらして事のなりゆきを危ぶみ心痛するをいふ。

○勇 五左衛門。

○おろく 涙涙に目のうるむこと。おろくは關々の義。「おろ覚え」などの「おろ」も關の義である。

○うせる 「おはせる」「わせる」「うせる」と種別した語。さざる。来る。牽引にて「うせ」を見よ。

○ちよこく 惣目にして、こせつくさま。ここは、氣散して、こつそりて行くさまをいふ。

○納屋の下 納屋とは物置小屋をいふ。貞享・元祿頃大阪の納屋の下あたりは、夜陰に立者がさまよひて程を賣る所であつた。ここも、大阪天神市(寄物の市場がある)の濱納屋の下をさまよふ立君を買ふ事をいうのである。

○ごくにも立たぬ 何の頼みにもならぬ。「ごく」は語句で、言句に立たぬ義である。「様調菜」に「くはにたすといふは不埒言句の義なるべし、言語通断といふ如し」とある。

○な 感動の意を示す。なあ。

○裏町 口にごそ憎やくと言へど、その心の底は憎やの裏の不便に思ふを、裏町にいひかく。

○心に物を言はず 口では言はないで、心に言はせる。即ち口に語らで心で思ふをいふ。

○十悪人 殺生・偷盜・邪淫(以上身業)、妄語・綺語・惡口・兩舌(以上口業)、貪欲・瞋恚・愚癡(以上意業)の惡業を犯す者。以て大惡人の意にいふ。

て誰じやもふ寝ました、「御無心ながらま一度お尋申たい、紀伊の國屋の小春殿はお歸りなされたか、若し治兵衛と連立て行きはなされぬか」、「ヤ、ヤ、何じや小春殿は二階に寐てじや」、「ア先心が落著た、心中の念は無い何處に屈んで此苦をかける、一門一家親兄弟が、固唾を吞んで臍腑を揉むとはよも知るまい、鼻の根に我身を忘れ、無分別も出やうかと、意見の種に勘太郎を、連れて尋る甲斐もなく、今迄逢はぬは何事」と、おろく涙の獨言、隠るゝ間の隔てねば、聞えて治兵衛も息を詰め涙吞込ばかりなり、「ヤイ三五郎、阿房めが夜々うせる所外には知らぬか」と、言へば阿房は我名ぞと心得て、「知つて居れど爰では恥しうて言はれぬ」、「知つて居るとはサア何處じや言ふて聞かせ」、「聞た跡で叱らしやんな、毎晩ちよこく行く處は、市の側の納屋の下、大痴漢めそれを誰が吟味する、サア來い裏町を尋て見ん、勘太郎に風引かすな、ごくにも立たぬ父めを持て、可愛や冷たいめをするな、此冷たさでしまへばよいが、ひよつと憂い目は見せまいか、憎やく」の底心は、不便の「裏町を、いざ尋ん」と行過る、影隔れば駈出て、跡懐しげに伸上り、心に物を言わせては、十悪人の此治兵衛、死次第と

○とても 助詞「とても」の添まつた副詞。何ごしても。

○上の町 (既出)

○たぐる 咳をする。「くるくく」は、咳を絶えずまをいひ、これに「来るをいひかけた。近松作「博多小女郎被上」之巻に、「くるくく咳たぐる胸を押へ」。

○ごよざ (既出)

○葛城の神隠れ この文は、人目を忍ぶ治兵衛は、人に見附けられては辛く、森の方隠れて番太郎を通り過ぎさせといふ意。それに、葛城山一言主の神が己が親の醜きを恥けて、晝は人目を忍はれた故事を引用したのである。謡曲「葛城」に「明くるわびしき葛城かづらき」の、神かくれにぞなりける」とある。「葛城」は謡曲にも「かつらき」といはないで「かづらき」というである。

○しやくつて 「しやくりて」の促音便。いらだつて急に引く。「しやくる」といふ。この語現今も福山市あたりでは普通に用ひられてゐる。「しやくつて響き」も激し響きの意である。

○心願ひ 小春は心願ひ。

○三分四分五分一寸 車戸の少しづつ明くを示す。

○一寸の先の地獄 やがて地獄行き。證に「一寸先は闇」といふ、闇を地獄にいひかへたのである。

○年の朝 心遣ひ去つて新年の朝の如き心地よい氣分さの意。この文は「地獄」「鬼」の縁語によ

も捨置かれず、跡から跡迄御厄介、物體なや」と手を合はせ、伏拜み〜「猶此上のお慈悲には、子供が事を」とばかりにて暫し、涙に咽びしが、とても覺悟を極めし上、小春や待たん」と大和屋の、潜戸の隙間さし覗けば、内にちら附人影は「小春じやないか、待てと知らせの合圖の咳き、エヘン、〜かつち〜ゑへんに拍子木打交せて、上の町から番太郎が、くるくくたぐる風の夜は、咳き〜廻る火用心、ごよざ、〜、〜」も人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し、隙を伺ひ立寄れば、潜戸内からそつと明く、「小春か」、「待てか、治兵衛様早ふ出たい」と氣を急げば、急ぐ程廻る車戸の、明くるを人や聞附んと、しやくつて明くればしやくつて響き、耳に轟く胸の内、治兵衛が外から手を添へても、心願ひに手先も願ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦しみより、鬼の見ぬ間とやう〜に明て、嬉しき年の朝、小春は内を脱け出て、互に手に手を取交はし、北へ行かふか南へか、西、か、東か行末も、心の早瀬鯉川流る、月に逆らひて足を、はかりに

※三重

※三重

り、又鬼より「おにやらひ」(追纏)を聯想して、早の朝あさといひつづけた。

○心の早瀬はやせ蛭川 心の急き立つを早瀬にいひかけて「蛭川」につづけ、以て心が憂鬱に沈むを蛭川にいひかけた。

○流るる月に逆らひて 月影を映せる蛭川の事は西に流れ、小春・治兵衛の足は東に歩み行けば、かくいう。

○三重 (見索引)。三重であるから、「走り行く」を略して次の文の「走り書き」につづけた。

○走り書き 筆を走らして直體に書くこと。「翁草」に「駕籠にて走りかへりしまま書きつけしにて、走り香と奔出し」とあるは、曲解捏造の説である。

○近衛流 近衛信尹のぶたしの奔流をいひ、講道本の字はこの書風である。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○野郎帽子 貞享・元禄頃の俳優は若衆役者の前髪を剃去り、紫縮緬で作つた帽子を被つたものである。「今様二十四孝(寶永六年刊)」に「髷の木は近衛流、野郎の帽子は紫云々」。

○若紫 淡紫。

○惡所狂ひ 色里狂ひ。差違に耽けること。

○因果經 釋尊が因果應報の例を擧げて教訓した小乘教の佛典である。(この文は「夏き身の因果」

### 名残の橋盡し

走り書きはしりかき、謠の本うたひは近衛流ちかへりうりう、野郎帽子やろうぼうしは若紫わかしむらき、惡所狂ひあくじょうきやうの、身の果はては、斯かく成行なりゆくと、定まりしさだまりし、釋迦しやくかの教おとへも有あることか見たし憂うれき身の因果經いんがきやう、明日あすは世上せじやうの言こと

種くさに、紙屋治兵衛しやうべいが心中しんちゆうと、徒名散あだなちり行ゆく櫻木うづもらぎに、根掘ねほり葉掘はほりを繪草紙えくさしの、版摺はんず

る紙かみの其中なかに有ありとも知らぬ死神しじみに、誘さそはれ行ゆくも商賣しやうばいに、疎そとき報ひかりと觀念くわんねんも、とすれば心引こころひかされて歩あゆみ、惱なやむぞ道理たうりなる、比ひは十月じふがつ、十五夜じふごの月つきにも見えぬ、身の上みの上

は、心の闇やみの標しるしかや、今置いまおく霜しもは明日あす消きゆるはかなき譬たとへのそれよりも先まへ消きへ行ゆく

閨わやの内うち、いとし可愛かほひと締しめて寢ねし、移うつり香かも何なにと、流ながれの、蛭川しむがは、西にしに見みて、朝あさ

夕渡ゆふわたる、此橋こゝの天神橋あまのつゝみは其昔むかし、菅丞相かんせうじやうと申まをせし時筑紫つくしへ流ながされ給たまひしに、君きみを慕した

にひかかく。そして「過去現在因果經」に「欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因」とあるによつて、かくいう。

○櫻木 繪草紙の版木は櫻であるによつてかくいう。散り行くも、櫻花の散り行くも、櫻木に彫られ繪草紙に印刷されて世上せじやうに愛敬あいけいされるをいひかけた。

○繪草紙 世上せじやうの事變ことわり者もの評判へいぱん情死じやうじなきの出来事できごとを書き、僅か一二枚の粗悪そあくな小冊せうさくである。これ我が國新聞こくしんぶんの紀元きげんをなすもので、之を賣り歩く者を繪草紙賣えくさしうりといふ。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○觀念 觀摩觀念の義。轉じて、あきらめる事をいふ。

○冷泉 淨瑠璃節の一である冷泉節をいふ。索引によつて「泉」を見よ。

○丞相 左右大臣をいふ。菅原道真は右大臣であつた。

○君を慕ひて 梅田橋 菅公が流罪の身となつて京都を出られる時、「うち吹かば匂もこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」と歎かれた。梅がこの歌に感じて大宰府まで飛んで行つたといふ。この飛梅の故事を梅田橋にいひかけた。

○老松 箕前太宰府天滿宮の地にある名木老松に、大阪西天滿老松町をきかせたのである。老松は追松ともいひ、梅が飛んだ跡を追うて松も太宰府に飛んだといふことが「天神本地」(慶安元年刊)に見えてゐる。

○縁橋 松の縁を縁橋にいひかく。縁橋・梅田橋・櫻橋、櫻橋は皆観川に架す。この所の文は、菅公の詠と俗傳といふ「梅は飛び櫻は結る、世の中に、何とて松のつれなるらん」によつて構想したものである。この歌は「天神本地」にも見え、後に「菅原傳授手製盛」によつて有名になつた。

○跡に焦るる櫻橋 菅公が太宰府に行かれた後に、櫻は菅公を慕ひ燃れて遂に枯れた。その櫻を櫻橋にいひかけ、そしてこれが櫻橋の見納めかと思ひて思ひ燃れる意をきかせた。

○一首の歌 俗傳に菅公の詠といふ「梅は飛び云々」(前出)の歌をさす。

○あら神 あらひと(現人)神。人でありながら神に祭られてゐる者で、威靈あるによつていふ。

○いたいけ 傷い氣の鶴の傷はしう思はれるはむかはゆけ。甚だかまゆけ。

○一杯もなき 「分別の一杯もなき」と受けたのである。情死するそのまゝは、小さな鴛貝の殻に一杯も無い全くの無分別から起つた意を櫻橋にかけた。

○大江橋 堂島川に架す。

○難波小橋 観川の口に架す。

○舟入橋 これは橋名ではなく、川から蔵屋敷へ舟を運すやうに流れを引人れて、其の流れの上に

ひて太宰府へたつた一飛梅田橋、跡追松の縁橋、別れを歎き、悲しみて跡に焦る、櫻橋、今に咄を聞渡る、一首の歌の御威徳、かゝる尊き現神の、氏子と生れし身を持って、其方も殺し我も死ぬ、元はと、問へば分別のあのいたいけな貝殻に、一杯も無き蜆橋、短き物は我々が、此世の住居、秋の日よ十九と、二十八年の、今日の今宵を限りにて、二人いの、ちの棄て處、爺と婆との末迄も無事で添はん

と契りしに、丸三年も、馴染まひで、此災難に大江橋「あれ見や難波小橋から、舟入橋の濱傳ひ、是迄来れば来る程は冥途の道が近附」と、歎けば女も縫り寄、

「もう此道が冥途か」と見交わす顔も見えぬ程、落る涙に堀川の橋も水にや浸らん、北へ歩めば、我宿を一目に見るも見返らず、子供の行衛女房の、哀れも胸に押包み、南へ渡る橋柱數も限らぬ家々を、いかに名附て八軒屋、誰と伏見の下り舟着かぬ内にと道急ぐ、此世を捨て、行身には、聞も恐し、天滿橋、淀と大和の二川を、一ッ流れの、大川や水と魚とは連れて行、我も小春と二人連れ一ッ刃の三瀬川、手向けの水に請たやな、何か歎かん、此世でこそは添はずとも、未來は、言ふに及ず今度の、つ、と今度の其、先の世迄も夫婦ぞや、一ッ連の頼には、

架けた橋をいうたもので、太平洋附近にあつたのをいうたのである。

○堀川の橋 「攝陽群談」七に「天満堀川、天満小橋の次にあり、東西共に堀川町と稱するの沙り也」

○橋柱數も限らぬ家々 天神橋の數々、きれぬ多くの柱と、八軒屋に建ち並ぶ無數の家々をいひかけてかくいうた。

○八軒屋 大阪天満橋南詰から天神橋南詰に至る間にある邊邊で、伏見通ひの船乗り場である。「浪花奇談」に「八軒屋は古へ川に添ひて家八軒ならびありし、其頃は濠洲に家なくして、外に類もなき故に八軒屋と號せしなり」。

○天満橋 天神橋の東にあつて谷町筋に當る。

○淀と大和の二川 淀川と大和川とは天満橋の上流で合して大川となる。

○大川 天満橋筋二丁目あたりから西へ土佐堀川に至る間の稱。

○三瀬川 冥途にある三途河をいひ、三つつの渡場がある。蓋し三瀬道を河に喩へたものである。

○つとと さんご。ずつと。

○夏書 夏季九十日間経文或は信仰する佛名を記すことをいふ。こゝは觀音經を書寫したのである。

○普門品妙法蓮華經 妙法蓮華經・普門品は所謂觀音經である。

○京橋 天満橋の東にあつて、大和川が大川に流れる所に架す。

○越ゆれば到る…法を得て 七五調今様

一夏に一部、夏書せし、大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋を、越ゆれば到る彼の岸

の玉の臺に法を得て、佛の姿に身をなり橋、衆生濟度がまゝならば流れの人の此

後は、絶へて心中せぬ様に、守りたいぞと、及なき、願ひも世上の世迷言、思ひ

遣られて哀れなり野田の入江の、水煙、山の端白くほのくと、「あれ寺々の、鐘

の聲鏗々、斯うして何日迄か、とても長らへ果てぬ身を最期急がん此方へ」と手

に百八の玉の緒を、涙の玉に線交せて南無網嶋の大長寺、數の外面のいさゝ川、

流れ漲る樋の上を最期、所と著にける、なふいつ迄うかく歩みても、爰ぞ人の

死場とて定まりし所もなし、いざ爰を往生場」と手を取土に坐しければ、「されば

船の地蔵和歌の調子で語る。但しこの文は、地蔵尊和讃の文ではない。

○彼の岸 極樂淨土の彼岸。

○おなり橋 身を成りに御成橋おなりはしをいひかけた。「御成橋」は京橋の北の小橋の稱であつて、網島と相生町との間に架し、備前島橋のことで、大阪城への通路に當る。

○流れの人 遊女をいふ。在昔遊女は多く水邊の地に住し、舟に乗つて客に接したからの稱であらう。

○よまひごと 風潮をいふこと。

○野田 網島の北に當り、櫛宮あたりの地名。

○鏗々 梵鐘の鳴る音の形容語。「禮記・樂記篇」に「鐘磬鏗々以

立號。近松作非簡葉平河内通に「かゝく、と問近く爰に鐘の聲。

○百八の玉の緒 「百八の珠たま」に「玉の緒」をいひかく。百八の珠とは數珠をいふ。數珠は百八箇の珠を聯ねて造れるものを正規とす。蓋し百八煩惱を滅盡する爲に擇んだ數である。玉の緒とは命のいのちをいふ。

○網島 今の大阪市北區網島町。

○大長寺 網島の北端にある淨土宗の寺院で、本尊は阿彌陀如来である。境内に紙治小菴の墓がある。明治四十二年に約二丁東の東野田(市電東野田四丁目下車)に移轉した。

○いささ川 水のいささか流れる川。細流。

○なういつ迄うかく云々 治兵衛の詞。

○挨拶切る 關係を絶つ。縁を切る。

○一座流れ 一座した時だけの情敵であつて、眞實の情なきこと。對坐した時だけの懸念。

○勤めの者 遊女。

○地水火風 之を四大といふ。四大は萬物に周

遍し、萬有の四大原素である。世界の萬像皆この四大和合によつて成る。「阿覺經」に「我今此身四大和合」。之に空を加へて五大といふ。五輪塔はこの五大の形相を配して造つたものである。

○合點 合點せよ。

○三界 欲界・色界・無色界をいふ。三界はいづれも有漏の迷界なれば、婆娑即ち現世の惑をいふ。「三界の家を出で」とは、借宿は浮世の煩惱を解脱して行雲流水の身なればいふ。

○妻子珍寶不隨者 出家して佛道を修める者は、妻子も珍寶も身に隨はず。「六集經」佛頌に「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」。

○投烏田 烏田醬の根のさがつたもの。「投巾」は後方にさがることをついふ。「投巾」「投巾巾」などこの類である。

○夫婦の義理と…抱帯此方へ 治兵衛の詞。

○とてももの事 いつその事。

◇一切の執着をすてて佛縁にすがり、成佛得脱する様は、佛者が往生の本懐を遂げる如くである。

こそ死場は何處も同じ事と言ひながら、私が道々思ふにも二人が死顔並べて、小

春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、お三様より頼にて殺してくるな殺すまい、

挨拶切ると取替せし其の文を反古にし、大事の男を咳かしての心中は、さすが一

座流れの勤めの者、義理知らず偽り者と世の人千人萬人より、お三様一人のさ

げしみ、恨妬みもさぞと思ひやり、未來の迷ひは是一つ、私を爰で殺して此方様

何處ぞ所を變へ、ついと脇で」と打凭れ口説けば共に口説き泣、「ア、愚痴な事は

かりお三は鼻に取返され、暇を遣れば他人と他人、離別の女に何の義理、道すが

ら言ふ通り今度のくすんど今度の先の世迄も女夫と契る此二人、枕を並べ死ぬ

るに誰が講る誰が妬む、「サア其離別は誰が業私より此方さん猶愚痴な、體が彼

の世へ連れ立か、所々の死にをして假令此體は鳶鳥につゞかれても、二人の魂

つきまつはり、地獄へも極樂へも連れだつて下さんせ」と又伏沈み泣ければ、「ア、

それよ〜此體は、地水火風死ぬれば空に歸る、後生七生朽ちせぬ、夫婦の魂

離れぬ標合點」と、脇差すは抜き放し元結際より我黒髪、ふつくと切て「是見や

小春、此髪の有中は紙屋治兵衛といふお三が夫、髪切たれば出家の身三界の家を

○捨身 俗界を捨てて佛門に入つた身。

○抱帯 衣服の裾をつりあける爲に婦人が腰にまきしごき帯である。

○若紫 紫の色の淺きもの。紫をゆかりの意にいふことあれば、その意をもまかせた。近松作「冥途の飛脚」に「びらり帽子の紫や、色で違ひしはばや昔。

○まないた木 「まなは板木」の時であらう。「まなはは「てうなめはつり」(新目研)をすることをいふ。樋小屋の水門の上に渡せる新目研の横木をいうたものである。

○雉の 雉の如く。雉はつまみ戀ふものなればかくいふ。「冥結び」も狩の縁語である。

○死なしやんする 「する」と連體形でいひ切つた所に力ある體氣を示す。死なつしやいまするぞよ。この用法は「頼もしく」といはないで「頼もししく」といひ切ると同じ類である。これらを文法の破格と見るはよくない。

○刃で死ぬるは…苦痛なされう 刃で死ぬるは一思ひに死なれますが、あなたの極死なさるはずに死なれず、さぞ苦痛なさいますぞよ。この小春の言葉は、前に小春が侍に問うた言葉に「自害するさ首括るさば、定めしこの咽を切る方がたんと痛いでござんしよ」とあるに應じ、時々心の迷ふ悲痛な情を見せて、哀れは更に深い。

○おろか 「おろそか」の巻。わけへたて。  
○西 極樂淨土はこの娑婆世界より西方十萬億土にあるといふによる。

出、妻子珍寶不隨者の法師、お三といふ女房なければ、お主が立つる義理もなし」

と涙ながら投出す、「ア、嬉しうござんす」と小春も脇差取上洗ひつ梳いつ撫附し、

酷や惜氣も投島田はらりと切て投げ棄る、枯野の薄夜半の霜共に亂る、哀れさよ、

浮世を遁れし、尼・法師、夫婦の義理とは俗の昔、とても事の事にさつぱりと死場

も變へて山と川、此樋の上を山になぞらへ其方が最期我は又、此流れにて首縊

り最期は同じ時ながら、捨身の品も所も變へてお三に立抜く心の道、その抱帯此

方へ」と若紫の色も香も、無常の風に縮緬の此世彼の世の二重廻り、樋のまな

いた木にしつかと括り先を結んで狩場の雉の、妻故我も首締め括る冥結び、我と

我身の死捨へ見るに目も昏れ心昏れ、此方さんそれで死なしやんする、所を隔て

死ぬれば側に居るも少の間、爰へ」と手を取合ひ「刃で死ぬるは一思ひ、さ

ぞ苦痛なされうと、思へばいとしい」と止め、かねたる忍び泣き首括るも咽

突くも死ぬるにおろかの有物か、由ない事に氣を觸れ最期の念を亂さずとも、西

へ」と行月を如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな、心残りの事あらば

言ふて死にや、「何にも無い」と、此方さん定めてお二人の子達の事が氣に懸ろ、

○ひよんな事 いやな事。(見索引)  
 ○泣かしやる 泣かしてくれる。  
 ○聲も争ふ村鳥 治兵衛の鳴咽(なげなげ)を入つての聲と、群鳥の鳴く聲と、いづれがよくなくか争ふふとの意。

○牛王 紀州熊野権現から出す牛王の起請(おきこ)の文にある「熊野牛王の村鳥」を見よ。「牛王の裏に誓詞(ちかひことば)三羽づゝ死ぬる」とある、この迷信はかなり昔から傳はつたもので、明和頃の川柳にも「熊野では今日も落ちた三羽めてやりし」といふがある。この川柳の意も、熊野牛王の誓紙に誓約を書く者が多いので、今日もその爲に熊野の鳥が落ちて死んだから埋めてやれといふのである。

○あらたまの年の短詞 蓋しあらたまの年の歳で、年の枕詞となつたのであらう。それより「月」「世」「春」などにもかけていふ枕詞。

○かはい 鳥の鳴聲に「可愛(こひ)をいひかく。

○涙に閉づる鬢の髪 顔と顔を打重ねて共に泣くのであるから、其の涙は互の鬢髪を濡らし髪にふさがると「閉づる」は、髪にふさがると、眼らんだ鬢髪の濡れて頭に掩附けたやうになるその意をいひかけたのである。

○鏡 扇柄のお勧めの鏡。  
 ○南無三寶 「これはしまつた」といふ時に發する詞。(既出)。南無三寶長きは頭韻法。

○じんどう 晨朝に尋常をいひかく。「晨朝」は六ツ時即ち午前六時。「尋常」はわづれ争立派の意である。

「アレひよんな事言ひ出して又泣かしやる、父親が今死ぬるとも何心なくすやすやと、可愛や寐顔見る様な、忘れぬはこればかり」とかつばと伏して泣沈む、聲も争ふ村鳥 嗚離れて鳴く聲は、今の哀れを問ふやとていと涙を添へにける、

「なふあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓詞一枚書く度に、熊野の鳥がお山にて三羽づゝ死ぬると、昔より言ひ傳へしが、我と其方が新玉の年の初めに起請の書初、月の初め月頭書さし誓詞の數々、その度毎に三羽づゝ殺せし鳥は幾許ぞや、常にはかはい」と聞今宵の耳へは、其殺生の恨の罪、報ひ

と聞ゆるぞや、報ひとは誰故ぞ我故辛き死を遂ぐる、赦してくれ」と抱寄すれば、「否私故」と締寄せて顔と顔を打重ね、涙に閉づる鬢の髪野邊の、嵐に凍りけり、後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短夜とはや明渡る、

「晨朝に最期は今ぞ」と引寄せて、「跡迄残る死顔に泣顔残すな」「残さじ」と、につと笑顔の白々と霜に凍えて手も顫ひ、我から先に目も昏み刃の立所も泣涙、  
 「ア、急くまい急くまい」「早う」と女が男むを力草、風誘ひ來る念佛は我に勧むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され引据へても仲返り、七顛八倒



○彌陀の利劍 「般若護」にある「利劍即是彌陀」の文句によつて、利劍をかくいうた。利劍即是彌陀劍とは、阿彌陀佛名號の功力は無明の煩惱を斷絶すること、恰も利劍の物を斬去るやうであるこの意。

こは如何に切先咽の笛を外れ、死にもやらざる最期の業苦共に亂れて、苦しみの、氣を取直し引寄せて、鏢元迄刺通したる一刀、刺る苦しき曉の見果てぬ夢と消へ果てたり、頭北面西右脇臥に羽織打被せ死散をつくろひ、泣て盡きせぬ名残の杖

○切先 刀のはさまをいひ、最もよく切れる所である。切先三寸といふ詞もある。

見捨て、抱を手練り寄せ、首に毘を引掛くる寺の念佛も切回向、有縁無縁乃至法界、平等の聲を限りに樋の上より、一蓮托生南無阿彌陀佛」と踏外し誓苦しむ、生瓢風に揺らるゝ如くにて、次第に絶ゆる呼吸の道息堰き止むる樋の口に、此世

○頭北面西右脇臥 頭を北方にし、顔面を西方に向けて臥し、右脇を牀席につけ、口と目とを閉ぢ、両脚を揃へ、左手を身上に順へて舒べる。これ釋尊入涅槃の形である。よつて以て死者に行ふ佛法である。

の縁は切れ果てたり、朝出の漁父が網の目に見附て「死だヤレ死んだ、出合へ出合へ」と聲々に言ひ廣たる物語、直に成佛得脱の誓の網嶋心中と目毎に、涙をか

○抱 抱臂の略。(既出)

けにける

○切回向 切り即ち終りの回向の義、唱へる回向文の終りをいふ。(この文に「寺」といへるは網嶋の大長寺(淨土宗)のことで、「有縁無縁乃至法界平等」といへるは、即ち淨土宗で唱へる切回向文である。)

けるは、空當ならぬやうに思はるれど、悟りを開いた目からはさうも見えぬであらう。

○有縁無縁：平等 佛を信じて佛ミ信者ミ縁ある者、或は信じないで縁なき者、乃至宇宙萬有一切衆生が佛菩薩の平等の利益(りやく)を享受するの意。淨土宗 別回向文「三界萬靈、六道衆生、有縁無縁、乃至法界、平等利益」の中の文句であつて、回向の終りにこの文を唱へ、十念を唱へ、念佛を唱へて回向を終るによつて、この別回向を「切回向」といふ。

○成佛得脱 「成佛」とは、衆生が菩提心を發起(はつきし)修行して、迷妄を斷じ真理を悟つて、佛果菩提を成就するをいふ。成佛すれば身心の繫縛苦患を脱するが故に成佛得脱といふ。

○一蓮托生 極樂淨土に往生して、身を同一蓮華上(たまり)に托すること。

○誓の網嶋 佛菩薩が、苦海に没在せる諸の衆生を救濟難救し給ふ四弘誓願を網に喩へて「誓の網」といひ、網に網嶋をいひかけた。本曲の題名は、この「網の目に見附て」と「網嶋心中」の文句に據つたものである。そして「天の網嶋」といふ詞は、「老子」にある「天網恢恢疎而不失」の中の語を網嶋にいひかけたので、色に身を持屬し罪業の網の感がある。近松作「博多小女郎渡枕」下之巻に「天の網地の繩に綱められし此物七」とある。

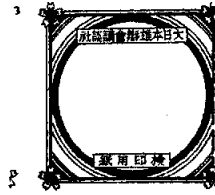


有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷  
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書  
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代  
東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治  
東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞  
東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)  
電話(34) 代表 五六二〇〇番  
牛込(34) 六二〇〇番  
五六二〇〇番

(本製地海天)